

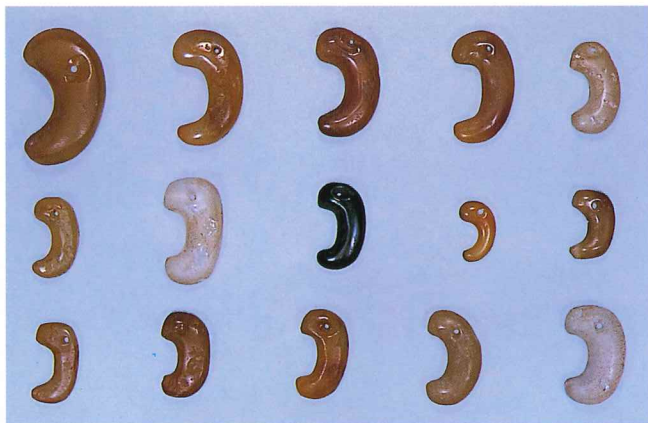
望月町文化財調査報告書 第23集

大塚第3号古墳

—緊急発掘調査報告書—

1997. 3

望 月 町
望月町教育委員会



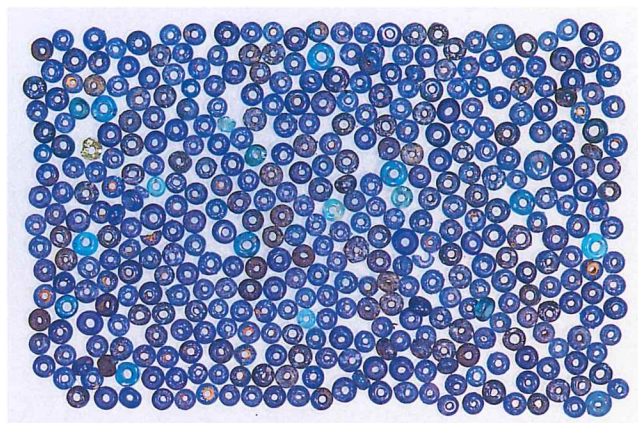
勾玉



切子玉



丸玉・白玉



ガラス小玉



金環



辻金具



横瓶



堤瓶



堤瓶

序

望月町長 佐藤 幸男

ここに、平成8年度国庫補助対象事業で実施した『大塚第3号古墳緊急発掘調査報告書』が刊行される運びになりました。

大塚第3号古墳は、自動車が頻繁に往来する国道142号線の道脇に位置しており、かなり目立つ存在であったにもかかわらず、実はその存在に気づいていた人はごく少数であったかと思われまゝす。古墳の上には昔から大きな碑が建っていたことすらも気づかれなかったのではないのでしょうか。本発掘調査により約1400年の眠りからみごとに再現された古墳は、保存はできなかったものの、古墳の構造や遺骨とともに出土した勾玉などの多量の遺物などから、当地域の過去における古墳文化の様子や当時の社会構造の一端をかいま見ることができ、また、それが今後における古墳研究の推進にも大きく貢献できるものと確信しております。

望月町における発掘調査は、昭和36年の開墾によりほぼ破壊されてしまった協和大谷地の山ノ神第1号古墳で遺物の採取処理が行なわれ、その内容が報告されているのが最初であると思われまゝすが、本格的に実施したのは昭和51年の下吹上遺跡が最初ということになります。この調査以降、本古墳の発掘調査を含め34件の発掘調査が実施され、その他にも遺跡詳細分布調査1件、試掘調査2件が行なわれるなど積極的な埋蔵文化財行政が実施されてきました。

近年、急激な開発の波の中で失われていく文化財は増大する一方ですが、歴史を築き上げてきた先人の足跡を守り、永く後世に伝えていくことは私たちにとっても、また、現代社会にとっても極めて重要な使命であると思ひます。動きの激しい社会の中にあっても、最小限度記録として保存し、また、活用することによって現代社会に役立てていかななくてはならないと痛感している次第です。

発掘調査に際しましては、調査主任・調査員・協力者の皆様には熱意あふれるご協力を賜りました。また、近隣の方々には、調査の運営に際し様々ご支援ご協力をいただきました。特に調査実施の申し出をしてくださった地主の高塚恵理さんや関係の皆様には、ご理解とご協力を賜りました。それぞれの関係された方々に対しまして、衷心より敬意と感謝の意を表する次第です。

本調査の成果が記録保存の役目を担って多くの方々が利用することによって、郷土を再認識し併せて地域の歴史研究の発展に寄与できれば幸いと存じ願うものであります。

平成9年3月17日

例 言

- 1、本書は、平成8年6月20日～7月30日まで実施した、大塚第3号古墳発掘調査の報告書である。
- 2、本調査は、個人の駐車場の造成に伴い大塚第3号古墳の現状が変更されるので、事前に発掘調査を実施し、記録保存することを目的に実施されたものである。
- 3、調査の組織は、望月町と望月町教育委員会が組織した発掘調査団によって実施した。
- 4、人骨の現地調査及び分析は、西沢寿晃氏に依頼して行なった。
- 5、遺構の実測は、福島邦男・掛川喜四郎・佐藤純一郎が行なった。
- 6、遺物の拓本は掛川喜四郎が、実測及び図化は福島邦男が行なった。
- 7、図・図版の作成は、福島邦男が行なった。
- 8、遺構及び遺物の写真撮影は、福島邦男が行なった。
- 9、遺物の復元は、福沢幸一氏に依頼して実施するとともに、掛川喜四郎もその任に当たった。
- 10、本書の執筆は、次のとおりである。

・序 文	望月町長	佐藤幸男
・第I章～第III章第3節		福島邦男
・	第4節	西沢寿晃
・	第5節	福島邦男
・第IV章		福島邦男

- 11、発掘調査に係わる経過書類・写真・遺物・原図等は、望月町教育委員会が責任保管している。

* 本文中の位置図・分布図に使用した地形図は、望月町発行の25,000分の1及び5,000分の1を使用した。

本文目次

口 絵	
序	
例 言	
第 I 章 発掘調査の経過	1
第 1 節 発掘調査に至る経過	1
第 2 節 発掘調査の構成	3
第 3 節 調査団組織	3
第 4 節 調査の経過 (調査日誌)	3
第 II 章 遺跡の立地と環境	5
第 1 節 遺跡の立地と自然的環境	5
第 2 節 遺跡の歴史的環境	7
第 III 章 遺構と遺物	9
第 1 節 墳 丘	9
1、墳丘の様子	9
2、墳丘からの遺物の出土状態	10
第 2 節 石 室	10
1、石室の様子	10
2、石室構築の手順と変遷	17
第 3 節 出土遺物	19
1、遺物の出土状態	19
2、出土遺物	21
A：土器類 B：装飾品 C：武具 D：生活具 E：馬具	
第 4 節 人 骨	33
1、人骨の保存状態	33
2、埋葬人骨の所見	36
第 5 節 縄文時代の出土遺物	36
1、土 器	36
2、石 器	37
第 V 章 総 括	41
参考文献	
図 版	

挿図目次

第1図	大塚第3号古墳位置図(1:50,000) … 6	第12図	大塚第3号古墳出土遺物(1:2) ……27
第2図	大塚第3号古墳周辺の遺跡分布図 (1:25,000) …… 6	第13図	大塚第3号古墳出土遺物 (1~31 1:1、32~36 1:2) ……28
第3図	大塚第3号古墳墳丘実測図(1:80) …11・12	第14図	大塚第3号古墳出土遺物(1:2) ……30
第4図	大塚第3号古墳墳丘断面図(1:120) …13・14	第15図	大塚第3号古墳出土遺物(1:2) ……31
第5図	大塚第3号古墳石室実測図(1:60) …15	第16図	大塚第3号古墳出土遺物(1:2) ……32
第6図	大塚第3号古墳閉塞実測図(1:60) …16	第17図	大塚第3号古墳出土人骨部位参考図 …35
第7図	大塚第3号古墳床面構築変遷図(1:60) …18	第18図	大塚遺跡出土遺物(1:3) ……38
第8図	大塚第3号古墳出土遺物位置図(1:60) …20	第19図	大塚遺跡出土遺物(1:3) ……39
第9図	大塚第3号古墳出土遺物(1:10) ……22	第20図	大塚遺跡出土遺物 (63~70 1:3、71・72 1:2) ……40
第10図	大塚第3号古墳出土遺物(1:6) ……23		
第11図	大塚第3号古墳出土遺物 (1~5・8・9 1:3、6・7 1:6) ……24		

表目次

第1表	大塚第3号古墳周辺の遺跡一覧表… 8	第3表	大塚第3号古墳出土刀子計測表……29
第2表	大塚第3号古墳出土装飾品計測表…26		

図版目次

第一図版	全 景	第九図版	遺 物
第二図版	遺 構	第十図版	遺 物
第三図版	遺 構	第十一図版	遺 物
第四図版	遺 構	第十二図版	遺 物
第五図版	遺 構	第十三図版	遺 物
第六図版	遺 構	第十四図版	遺 物
第七図版	遺 構	第十五図版	風 景
第八図版	遺 構	第十六図版	風 景

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 発掘調査に至る経過

大塚第 3 号古墳は、大塚古墳群の一つに数えられ、望月町を通過する国道142号線、兼ねて254号線の道脇の大字協和字大塚地籍に位置していた。平成 7 年 3 月に本古墳の存在している場所を削平して駐車場を造成するという話が教育委員会にもたらされ、同月現地において地主との協議が行なわれた。その後、4 月に正式に発掘調査実施についての依頼があった。5 月には長野県教育委員会文化課（現文化財保護課）・望月町教育委員会・地主との現地協議が行なわれた。そして、国庫補助事業で実施する方向で平成 8 年度の補助事業計画を提出するに至った。その後、10 月に平成 8 年度文化財関係補助事業計画の事情聴取が行なわれた。

平成 8 年 5 月には、補助金交付申請書を提出して 6 月より発掘調査を開始した。現場調査終了後は実績報告書を作成すべく整理作業を実施した。本発掘調査の経過及び内容は以下に記述する内容のとおりである。

平成 7 年度

- 3 月 1 日 大塚第 3 号古墳の所に、駐車場が造成されるという話が持ち込まれる。
- 3 月 15 日 第 1 回町教育委員会と地主による現地協議
- 3 月 22 日 第 2 回話し合い（町教育委員会と代理人）
- 4 月 7 日 「埋蔵文化財所在地の開発に伴う発掘調査の実施について（依頼）」（地主より）
- 5 月 15 日 「大塚第 3 号古墳の保護協議に伴う職員の派遣について（依頼）」 7 望教第 583 号
- 5 月 18 日 現地協議 長野県教育委員会指導主事 市村・小林
望月町教育委員会文化振興係長 福島
地主 高塚恵理、代理人 高塚 猛、高塚浩二
- 6 月 13 日 「平成 8 年度文化財関係補助事業計画について（照会）」 7 教文第 148 号
- 6 月 26 日 「平成 8 年度文化財関係補助事業計画について（回答）」 7 望教第 768 号
- 9 月 7 日 「平成 8 年度文化財関係補助事業計画の事情聴取について（通知）」 7 教文第 261 号
- 10 月 5 日 「平成 8 年度文化財関係補助事業計画について（提出）」 7 望教第 1174 号
- 10 月 18 日 平成 8 年度文化財関係補助事業計画の事情聴取 長野県職員会館 302 号会議室
- 11 月 29 日 「平成 8 年度文化財関係補助事業計画について（照会）」 7 教文第 355 号
- 12 月 4 日 「平成 8 年度文化財関係補助事業計画について」（伺）
- 12 月 8 日 「平成 8 年度文化財関係補助事業計画について（提出）」 7 望教第 1469 号

平成8年度

- 5月13日 「平成8年度大塚第3号古墳発掘調査の実施について」(伺)
- 5月15日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について」(伺)
- 5月16日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について(届)」8望教第561号
- 5月16日 「平成8年度文化財関係国庫補助事業について(通知)」(内示)8教文第1号
- 5月16日 「平成8年度文化財保護事業に対する県費補助事業について(通知)」(内示)8教文第2号
- 5月27日 「平成8年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書の提出について」(伺)
- 5月28日 「平成8年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書」8望教第591号
- 6月3日 「平成8年度文化財保護事業補助金交付申請書の提出について」(伺)
- 6月4日 「平成8年度文化財保護事業補助金交付申請書」8望教第668号
- 6月12日 「平成8年度大塚第3号古墳発掘調査の労災保険の申請について」(伺)
- 6月12日 「労災保険関係成立届」の提出について(伺)
- 6月14日 「大塚第3号古墳発掘調査の調査団の構成と調査員の委嘱及び作業員の雇用について」(伺) 6月14日 「労災保険概算保険料申告書」(提出)
- 6月14日 「大塚第3号古墳発掘調査の参加について(通知)」
- 8月5日 「埋蔵物発見届」及び「埋蔵文化財保管証」の提出(届)について(伺)
「埋蔵物発見届」8望教第1046号 「埋蔵文化財保管証」8望教第1046号
- 8月9日 「平成8年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定について(通知)」8教文第1号
- 8月9日 「平成8年度文化財保護事業補助金の交付決定について(通知)」8教文第2号
- 9月5日 「埋蔵物の文化財認定について(通知)」8教文第4-49号
- 2月3日 「平成8年度埋蔵文化財緊急発掘調査報告書印刷製本の実施について」(伺)
- 2月10日 「平成8年度埋蔵文化財緊急発掘調査報告書印刷製本の見積結果について」(伺)
- 2月10日 「平成8年度埋蔵文化財国庫補助事業発掘調査報告書印刷製本の再見積結果について」(伺)
- 2月12日 「平成8年度埋蔵文化財緊急発掘調査報告書印刷製本の委託契約について」(伺)
- 3月 「完了届」の提出
- 3月 「検査員の選定について」(伺)
- 3月 「検査結果について」(伺)
- 3月 「平成8年度国宝重要文化財等保存整備費補助金実績報告書の提出について」
- 3月 「平成8年度文化財保護事業補助金実績報告書の提出について」
「平成8年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の額の確定について」
「平成8年度文化財補護事業補助金の額の確定について」

第2節 発掘調査の構成

- 1、遺跡名 大塚第3号古墳
- 2、所在地 長野県北佐久郡望月町大字協和字大塚2391
- 3、調査原因 個人の駐車場の造成にともない第3号古墳に影響が及ぶため、発掘調査を実施し記録保存を図る。
- 4、調査委託者 地主 高塚恵理
- 5、調査受託者 望月町長 佐藤幸男
- 6、調査主体 望月町教育委員会
- 7、調査期間 現場調査 平成8年6月20日～平成8年7月30日
整理 ～平成9年3月21日
- 8、調査面積 113㎡以上
- 9、調査方法 平面調査及び断面調査

第3節 調査団組織

- 1、調査団長 田中 稔（望月町教育長）
- 2、調査担当者 福島邦男（望月町教育委員会文化振興係長・学芸員・日本考古学協会員）
- 3、調査主任 掛川喜四郎（望月町文化財保護審議会副会長・佐久考古学会員）
- 4、調査員 渡辺重義（軽井沢町文化財専門委員・長野県考古学会員）
（人骨分析）西沢寿晃（元信州大学第二解剖学教室職員）
- 5、調査協力者 吉沢浩矣、上野知一、川井正久、佐藤純一郎、川井 勲、庄司 勝、篠原久好、
林 久夫、重田八重子、重田秀子、高橋甫太
（遺物復元）福沢幸一（元長野県埋蔵文化財センター嘱託）
- 6、事務局 （望月町教育委員会）教育長 田中 稔、教育次長 渡辺正喜、
文化振興係長 福島邦男、文化振興係 小林良子

第4節 調査の経過（調査日誌）

- | | |
|--------------------------------------------------------------------|------------------------------------------|
| 6月20日 町長、教育長はじめ関係者の出席のもと、地主主催による神事及び調査団主催による結団式を挙げる。その後、墳丘の清掃を行なう。 | 6月21日 墳丘の調査を開始する。墳丘の上部より掘り込みを行なう。 |
| | 6月24日 奥壁と側壁の構造が確認できる状態まで進む。須恵器の甕や縄文土器の破片 |



作業風景

が出土する。

6月27～28日 玄室と羨道の構造確認調査を実施する。玄室より須恵器の甕、羨道より鉄製品が出土する。墳丘は、花壇やゴミの焼却場になっており、かなり崩されていた。

6月29日 遺物が比較的多く出土する。その確認面での写真撮影を月曜日に実施するため、土曜日ではあったが整備を行なう。

7月1～3日 破壊を受けているとはいえ、羨道部には閉塞が存在していることが確認され、清掃を兼ねて全体の確認を行なう。須恵器の甕の破片や金環などが出土する。

7月4～5日 玄室の床面の検出作業を続ける。僅かな礫面が顔を出す。相変わらず須恵器の甕の破片と、太刀の柄頭、人骨などが見つかる。

7月6日 望月町誌編纂講座の一環で、本古墳の見学を行なう。

7月9日～10日 玄室の床面がほぼ確定し、清掃を含め検出作業を行なう。閉塞の清掃も行なう。玄室より金環・鉄鍬・辻金具・轡・勾玉・ナツメ玉が見つかる。人骨は、大腿骨などが目立つ。頭蓋骨の形は分からなくなっていたが、歯は数本確認できたことで、各部位がそれぞれ存在していたよう

に思われた。墳丘の清掃も行なう。

7月11～12日 石室全体の清掃作業を行なう。勾玉・丸玉・ガラス小玉・太刀の金具・雲珠の破片などが出土する。ガラス小玉は、石室内からの排土を丁寧に水洗いした成果である。青銅製品は金メッキが明瞭に残っているものが存在する。墳丘の清掃作業も行ない、古墳全体の写真撮影を実施する。

7月15日 実測のための割り付け作業を行なう。

桐原健 長野県考古学会長と会田進氏が視察にくる。

遺物の取り上げ、上部床面の取り除きを行なう。ガラス小玉が集中して多数出土する。また、勾玉や鉄製品・青銅製品が出土する。

7月18～22日 玄室の下部床面の精査を行なう。人頭大の偏平な礫を丁寧に敷き詰めてあった。18日には西沢寿晃先生においていただき人骨の調査及びサンプリングをしていただく。

7月23～25日 石室の実測と墳丘の断面確認のための掘り込みを行なう。床面の実測終了の後、敷石のはぎ取りを行ない下部の観察をする。

7月26～30日 床面下部の様子を図や写真で記録し、30日に現場調査を終了した。

8月1～1月31日 図面の整理、出土遺物の整理と実測、写真撮影を行ない、図・図版の作成とともに原稿執筆を行なう。

2月13日 印刷製本請負契約の締結に基づき原稿を入稿する。

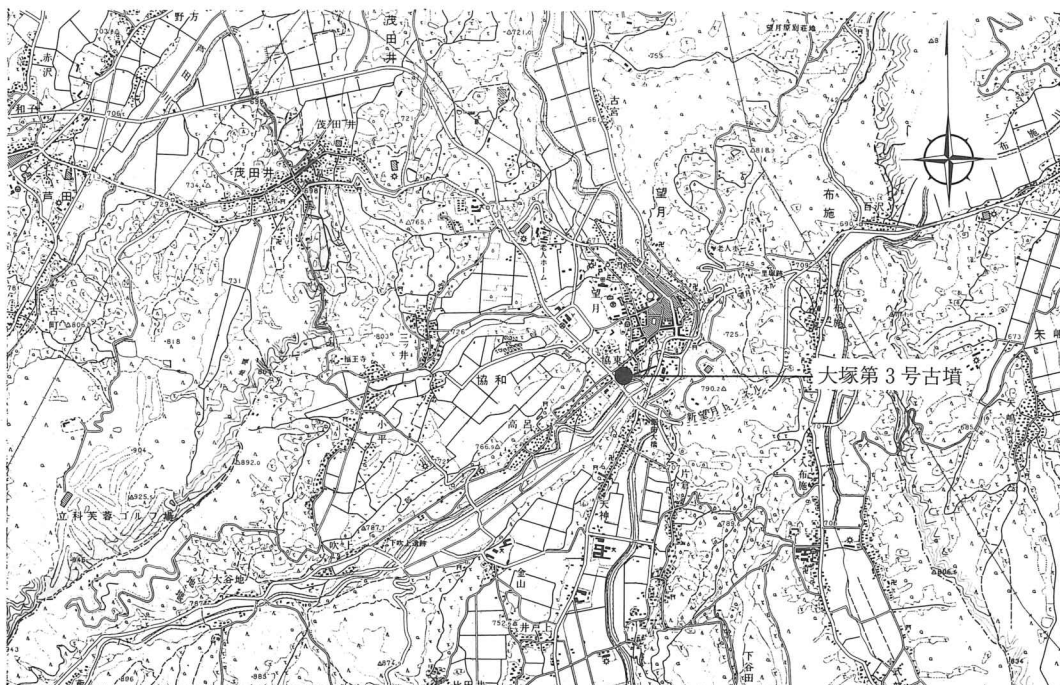
3月31日 実績報告書の提出。

第II章 遺跡の立地と環境

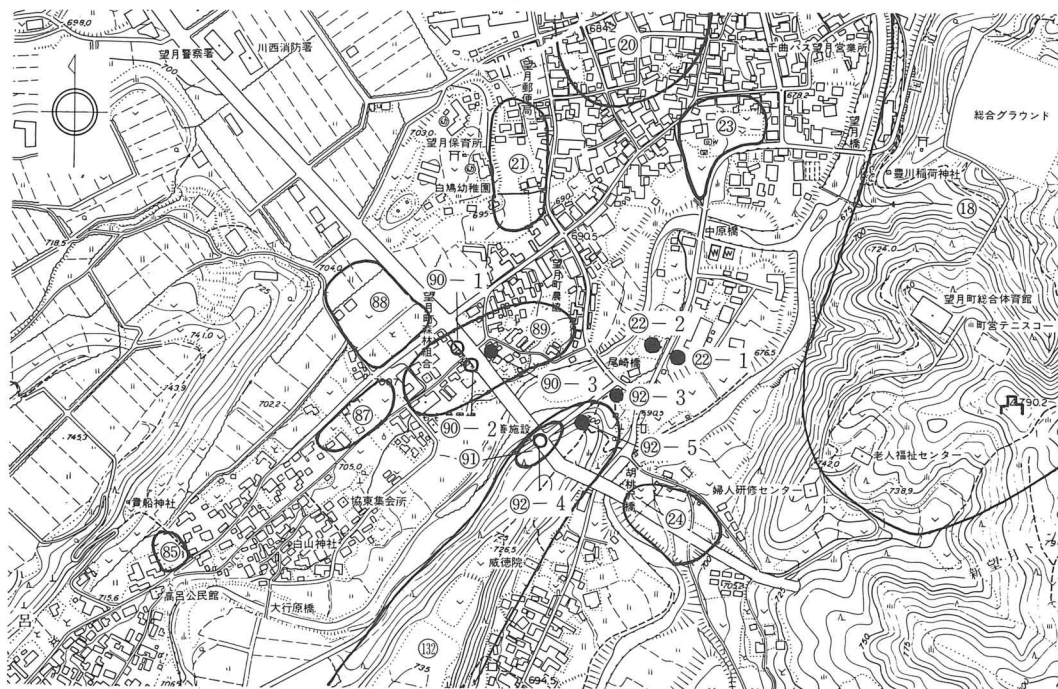
第1節 遺跡の立地と自然的環境

望月町は、北佐久郡の中でも千曲川の西方に位置し、北は北御牧村、西は立科町、東は浅科村、南は一部佐久市と茅野市に隣接している。西南方向には、山懐深い蓼科山（2530m）を中心とする山系が連なり、北東方向には千曲川を隔てて聳え立つ浅間山（2560m）の連山を臨むことができる。望月町の地質及び地形の形成は、大きく二つの要因に起因しているといえ、その一つは蓼科山の火山活動により基盤並びに地形の形成がなされていることであり、もう一つは、御牧原台地や八重原台地が地殻の断層運動によって形成されていることである。望月町にかかる御牧原台地は、その南端において上部に「相浜層」（模式地：佐久市相浜）と呼ばれる非常にろい湖沼性堆積層によって形成されており、各所に露頭箇所を見ることができる。堆積物は、凝灰岩、泥岩、砂岩及び礫質砂岩などで、幾層にも互層しており、ほぼ水平層に近い。これらの地層の中では、泥岩から針葉樹や広葉樹あるいは珪藻類の化石が産出し、比較的容易に採取することができる。また、相浜層の下部は、「瓜生坂層」（模式地：望月町大字望月）と呼ばれ、メタセコイヤやその他の化石が得られることから、相浜層が新生代第四紀更新生の前期と推定されるのに対し、瓜生坂層は、新生代第三紀鮮新生の後期に属すると推定されており、今から200万年前に形成されたといえる。一見すれば、蓼科山の裾野のように連なっているが、この瓜生坂地籍から御牧原台地にかけては、形成過程にかなりの相違がみられるものである。一方、蓼科火山によって形成された地籍は、立科町芦田付近、望月町の瓜生坂より北方と茂田井地籍を除く全地域、さらに浅科村の五郎兵衛新田付近にまで達しており、これらの地域を蓼科火山地域と呼んでいる。中央に位置する蓼科火山群の南方には、八ヶ岳火山群が連なり、また、西方には霧ヶ峰火山群がその雄姿をとどめている。蓼科山は、全般に緩傾斜の裾野が北方の望月町方面に延び、しかも雄大である。大河原峠付近にあっては、極めて急傾斜の谷を形成しているが、多くは蓼科山を中心に放射状に延びる緩やかな谷を形成している。これらの地域は、安山岩の分布が広く見られ、中でも両輝石安山岩、しそ輝石安山岩、角閃石安山岩が主体をなしている。これらは、望月町の浅田切、八丁地、畳石、菅原、大谷地、吹上など八丁地川の中・上流地域に見ることができ、しかも熱の珪化作用による板状節理がもののみごとに発達し、天然記念物のごとく美しい露頭を見ることができる。

望月町を流れる主流は、鹿曲川・細小路川・八丁地川・布施川の4河川であり、いずれも蓼科山を源流とし、長い裾野を縫って流下している。細小路川は春日で、また、八丁地川は望月で鹿曲川と合流し、北御牧村で千曲川に流れ込んでおり、布施川は、浅科村において千曲川と合流している。これら蓼科山と主流の4河川は、この地方においては人々の生活や動植物の成育にとっ



第1図 大塚第3号古墳位置図 (1 : 50,000)



第2図 大塚第3号古墳周辺の遺跡分布図 (1 : 25,000)

て必要不可欠な自然的条件であるとともに、これらの自然環境を取り入れながら過去から現在に至るまで日々刻々と生活が営まれたのであり、基本的な生命線であるといえる。

大塚第3号古墳は、鹿曲川との合流地点に近い八丁地川の左岸に位置しており、東側に緩やかに傾斜する平坦な地形をなしている。

地盤の形成層は、上部に腐葉土が堆積し、その下部に暫移層を挟んで黄色ローム層の地山が堆積している。

第2節 遺跡の歴史的環境

望月町に登録されている遺跡は、286遺跡であり、各遺跡を時代別に分析すれば、総数469遺跡を超えている。時代別にみるとこのうち最も多いのが平安時代で42.9%、次いで縄文時代の37.5%、続いて古墳時代の11.8%である。旧石器時代の遺跡は、『信濃資料』第2巻上に2遺跡が記載されているがその実態は不明であり、弥生時代の遺跡は、発掘調査によって遺物が少量出土しているに過ぎず、遺構は未だ発見されていない。

平安時代に遺跡が集中しているのは、奈良時代末に勅旨牧となったといわれる望月牧の貢馬の生産が、平安時代になると最も盛んになったことが要因と思われ、このことで人口が急増したためと考えられる。また、この時期の集落の分布は、権力を背景にした社会構造を象徴しているともみることができる。

古墳時代の遺跡は、4世紀後半期の玉作り工房址が確認された春日の後沖遺跡と6世紀の集落址の望月古宮の岩清水遺跡の2遺跡だけが、いわゆる集落遺跡でありその他は古墳である。

古墳は、合計51基の存在を確認しており、このうち現存しているのは25基である。望月地区では、武陵古墳群（現存4基）、布施地区では、柳沢古墳群11基（現存3基）、布施山寺古墳、大林古墳群（現存4基）、春日地区では、姫塚古墳、金塚古墳群8基以上（現存1基）、協和地区には、尾崎古墳群（望月地区分含む）5基（現存3基）、真光寺古墳群3基（現存1基）、山ノ神古墳群4基（現存3基）、内裏塚古墳2基（現存2基）、行屋上古墳、王塚古墳そして大塚古墳群6基（本発掘調査前・現存1基）が登録されている。これらの古墳を総体的に概観すると、特に八丁地川水系に集中して存在している傾向が見られ、古墳時代の社会構造の一端を示しているのかもしれない。

昭和55年に国道142号線バイパス建設工事にもなつて大塚第1・2号古墳と尾崎第3号古墳を発掘調査しており、いずれも石室全体がすでに破壊された状態であったため、古墳の性格をつかむことはできなかった。

大塚古墳群と尾崎古墳群は、八丁地川の左岸と右岸にそれぞれ位置しており、二つの古墳群として登録されている。しかし、立地的にも鹿曲川との合流地点に近い同一の条件であり、それぞれの古墳の位置関係もほぼ集中して存在していることから、同一の古墳群として捉えたほうがよ

いものと考えられるが、詳細なデータの得られている古墳は今回調査を実施した大塚第3号古墳だけであることから、内容的に大塚・尾崎両古墳の対比はできない。ただし、大塚第3号古墳は、数少ない巨石を使用した比較的大型の古墳であり、形態的に尾崎第1号古墳は現状の規模ではそれを上回って存在していることを見れば、同一傾向の古墳として存在しているとも考えられ、従って、同じ古墳群の中に存在する古墳として把握できるのではないかと推測される。

第1表 大塚第3号古墳周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種類	現状	遺構・遺物	備考
⑮	望月城跡	大字望月	城跡	山頂・山腹	陶器、かわらけ、石臼、印	昭和60年三の郭発掘・報告書
⑳	上ノ段遺跡	大字望月字上ノ段	集落址	段丘	(縄一前・中・後) 土器・石器 (打石斧・磨石斧)	住宅地・一部畑
㉑	金井原遺跡	大字望月字金井原	集落址	段丘・宅地・田・畑	(縄一中) 土器・石器	
㉒-1	尾崎第1号古墳	大字望月字中原	墳丘	段丘・宅地	(古一後)	現状をよく保存
㉒-2	尾崎第2号古墳	大字望月字中原	墳丘	段丘・水田	(古一後)	煙滅状態 石積みのみ復元
㉓	極楽寺遺跡	大字望月字極楽寺	集落址	段丘・畑	(縄一中・後) 中～後の敷石住居址・炉址・土器・石器	
㉔	胡桃沢遺跡	大字望月字胡桃沢	集落址	段丘・畑	(縄一中) 住居址4、土器・石器、(平)住居址6、土師器・須恵器	昭和58年度発掘・報告書
㉕	高呂遺跡	大字協和字高呂	散布地	段丘・畑・宅地	(平) 土師器・須恵器	
㉖	町屋敷遺跡	大字協和字町屋敷	集落址	段丘・畑・宅地	(平) 土師器・須恵器	
㉗	六反田遺跡	大字協和字六反田	集落址	段丘・畑	(平) 土師器・須恵器	
㉘	大塚遺跡	大字協和字大塚	集落址	段丘・畑・宅地	(縄一前・中・後) 炉址、土器・石器(石鏃・搔器・削器・石皿・打石斧・磨石斧)	
㉙-1	大塚第1号古墳	大字協和字大塚	墳丘	段丘	(古一後) 床の一部の敷石のみ検出	昭和55年度発掘・報告書
㉙-2	大塚第2号古墳	大字協和字大塚	墳丘	段丘	(古一後) 床の一部の敷石のみ検出	昭和55年度発掘・報告書
㉙-3	大塚第3号古墳	大字協和字大塚	墳丘	段丘	(古一後) 石室、勾玉・丸玉・切子玉・白玉・ナツメ玉・ガラス小玉・鏢・鞘金具・刀子・轡・辻金具・雲珠・太刀柄頭・金環・土師器高坏・須恵器壺・横瓶・埴瓶・坏等	平成8年度発掘・報告書
㉚	協和尾崎遺跡	大字協和字尾崎	散布地	段丘	(縄一早) 押型文土器	昭和55年度発掘・報告書
㉛-3	尾崎第3号古墳	大字協和字尾崎	墳丘	段丘	(古一後)	現状保存
㉛-4	尾崎第4号古墳	大字協和字尾崎	墳丘	段丘	(古一後) 基底部の根石のみ確認	昭和55年度発掘・報告書
㉛-5	尾崎第5号古墳	大字協和字尾崎	墳丘	山麓	(古一後)	現状保存
㉜	天神城跡	大字協和字尾崎・本城・塚田・青柳・上城口他	城跡	丘陵台地	(中) かわらけ、土師器	昭和55年・平成2・4年度発掘・報告書

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 墳 丘

1、墳丘の様子（第3・4図、第一・六～八図版）

本古墳には、古墳の天井石を利用して印刻した巨大な「諸国巡礼記念」碑が玄室の内部に建立され、また墳丘上には「馬頭観世音」碑がいずれも江戸時代に建てられており、少なくともすでに江戸時代の頃から古墳の現状を変更する行為が行なわれていたことを物語っている。また、戦後の開墾の時期に石室内部を掘り出し、直刀や勾玉などの遺物を多量に持ち出しており、その時の様子はまだ記憶にとどめられている。さらに、古墳の周囲は、東側に緩傾斜する地形をなしていたが、土地を平にするために側壁や閉塞の石を外して石垣を築き、墳丘の土を崩してならしている。続いて最近小規模なプレハブの仮設店舗の設置にともなって、墳丘の西側が南北方向に直線的に削り取られたり、墳丘を崩して花畑にしたり、あちらこちらに穴を掘ってゴミの焼却が行なわれていたり、墳丘全体が長い時間の経過とともにかなりの破壊を受けていた。

従って、調査前の様子は、天井石がすでに存在していないことは当然のことながら、玄室の側壁と奥壁の上部が、墳丘の土が削り取られていたことから露呈していた。また、墳丘取り崩しの時に出てきた葺石や土留石などは、露呈している側壁や奥壁付近に投げ上げてあり、元位置を移動していない石との区別をすることは不可能に近い状態であった。

現状で残されていた墳丘の規模は、東西14m、南北12m、高さは地盤の最も低い東側の基底部から計測すると1.4m、最も比高差の少ない西側で1.2mを測る。

本来の墳丘の規模は、A-B・C-Dトレンチ（第4図）によって、ほぼ推定できるまでに確認することができた。規模は、基底部の直径でA-B（北-南）15m以上、C-D（西-東）15m以上を測り、ほぼ15m程の円墳であったものと推定される。

墳丘の構築状態は、トレンチの掘り込み状況や断面によって観察することができた。A-Bトレンチの石室北側の断面部を見ると、第4層：奥壁を支える人頭大の河原石を置き、さらに拳大の礫を含めて多量の礫を積み上げ、第3層：その上部に黄色ロームを主体にした粘質土を載せ、第2層：その上に礫が少量含んだ黄色粘質土混じりの茶褐色土を積み上げ、第1層：現状では最上部の礫混じり茶褐色土が存在している。その上部は破壊されているため確認することはできないが、恐らくかなり高い位置まで何段かの土によって覆われ、葺石が行なわれていたものと思われる。C-Dトレンチの場合は石室より東側及び西側とも同様であるが、A-Bトレンチに比べ地山直上からの堆積状況が若干異なっている。それは、石室に近い位置の構造とそこからやや離れた構造の違いに外ならないものと考えられる。第4層は、地山のロームとは異なる黄色粘質土層、第3層は、茶褐色土混じりの黄色粘質土層、第2層と第1層はA-Bトレンチと同様である。

墳丘の周囲を取り囲む土留石は、北東側に僅かに残されていたが、墳丘の破壊によってかなりの部分が取り除かれてしまっていた。その状況から、基本的に人頭大の河原石で周囲を3段階に巡らしていたことが確認された。

全体にこれらの状況を見ると、石室の石組みを基本にしながら基礎を固め、段階的に盛土をしながら土留石を巡らし、再び盛土をするといった繰り返しにより墳丘を構築していった様子を確認することができた。

2、墳丘からの遺物の出土状態（第18～20図、第十四図版）

墳丘から出土した遺物は、最上部の層位から須恵器の甕形土器の破片が少量出土しており、さらに、その他第1層～第4層の全般にわたって縄文前期・中期・後期の土器片が出土している。

須恵器は青海波文をもつもので、本古墳にともなうものと考えてよいと思われ、かつて石室を掘り出した時の土に混じって外に出されたものが散布しているものと思われる。従って、墳丘上での墓前祭にともなう遺物とは考えにくいものであった。

出土した縄文土器は、大塚第3号古墳の存在している場所が縄文時代の古塚遺跡として登録されている地域であり、墳丘を構築するにあたって、散布している土器や石器が混入している土で覆ったため、盛土から土器が出土したものである。

遺物についての考察は、後章で記述する。

第2節 石 室

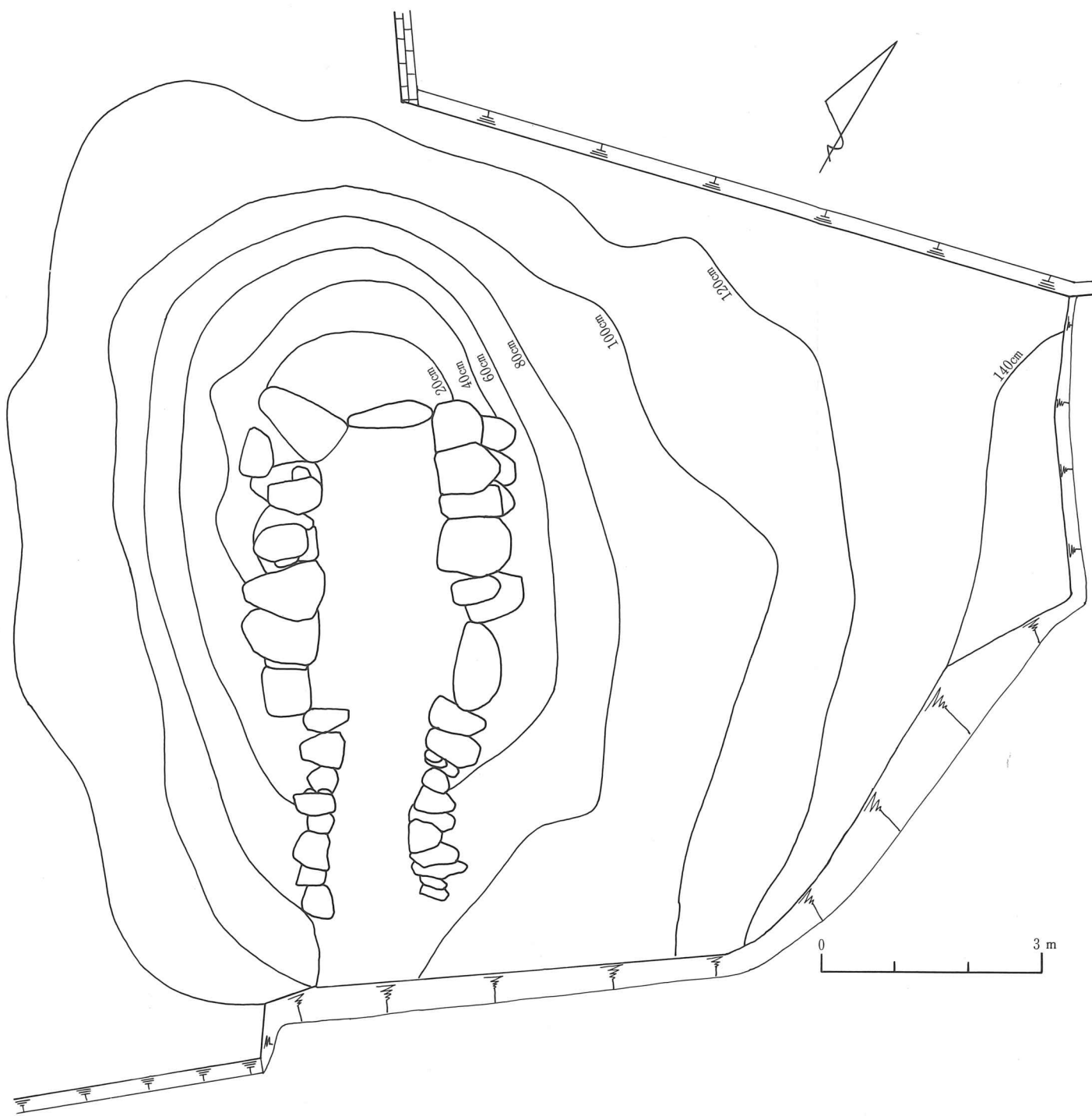
1、石室の様子（第5・6図、第二～五図版）

本古墳の石室の主軸は、真北よりやや西側に向くN30°Wである。地形の様子からみると、北東方向にやや緩傾斜する地形をなしており、真北に石室の主軸を合わせるとすれば、土地の形状から見て非常に不自然な状況になってしまう。従って、土地の条件に合わせて30°西に振って構築したものと思われる。

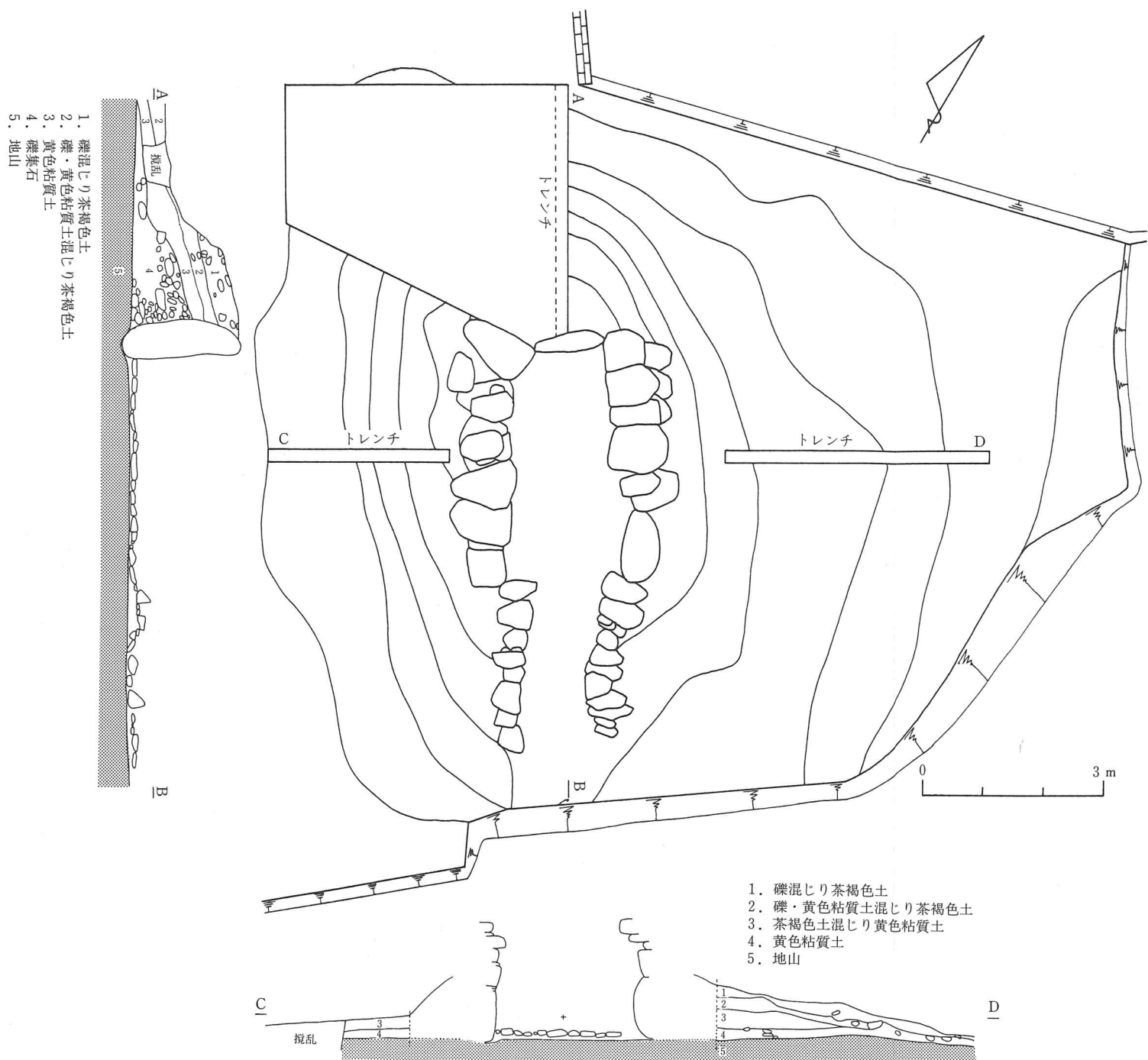
石室全体の主軸の長さは7m、このうち奥壁から玄門までの玄室の長さ3.8m、玄門から羨道端までの長さ3.2m、玄室の幅は、最大幅で2.4m、最小幅で1.4m、羨道部の幅は、最大幅で1.4m、最小幅で1.2mを測る。天井石はすでにないが床から天井部までの高さ1.8m、堀方から天井までの高さ1.95mを測る。玄室の高さは、現状では床面から1.44m～0.45mであるが、側壁のかなりの箇所の石が取り除かれており、本来の規模は推定でしか把握することができなかったが、玄室の天井石の載っていた側壁部を基準にすれば、床面から1.8m～1.9mになるものと思われる。

奥壁は、角のない丸みを帯びた1枚の巨石を地山上に立てて使用しており縦1.9m、横1.9m、厚さ0.65mを測る。

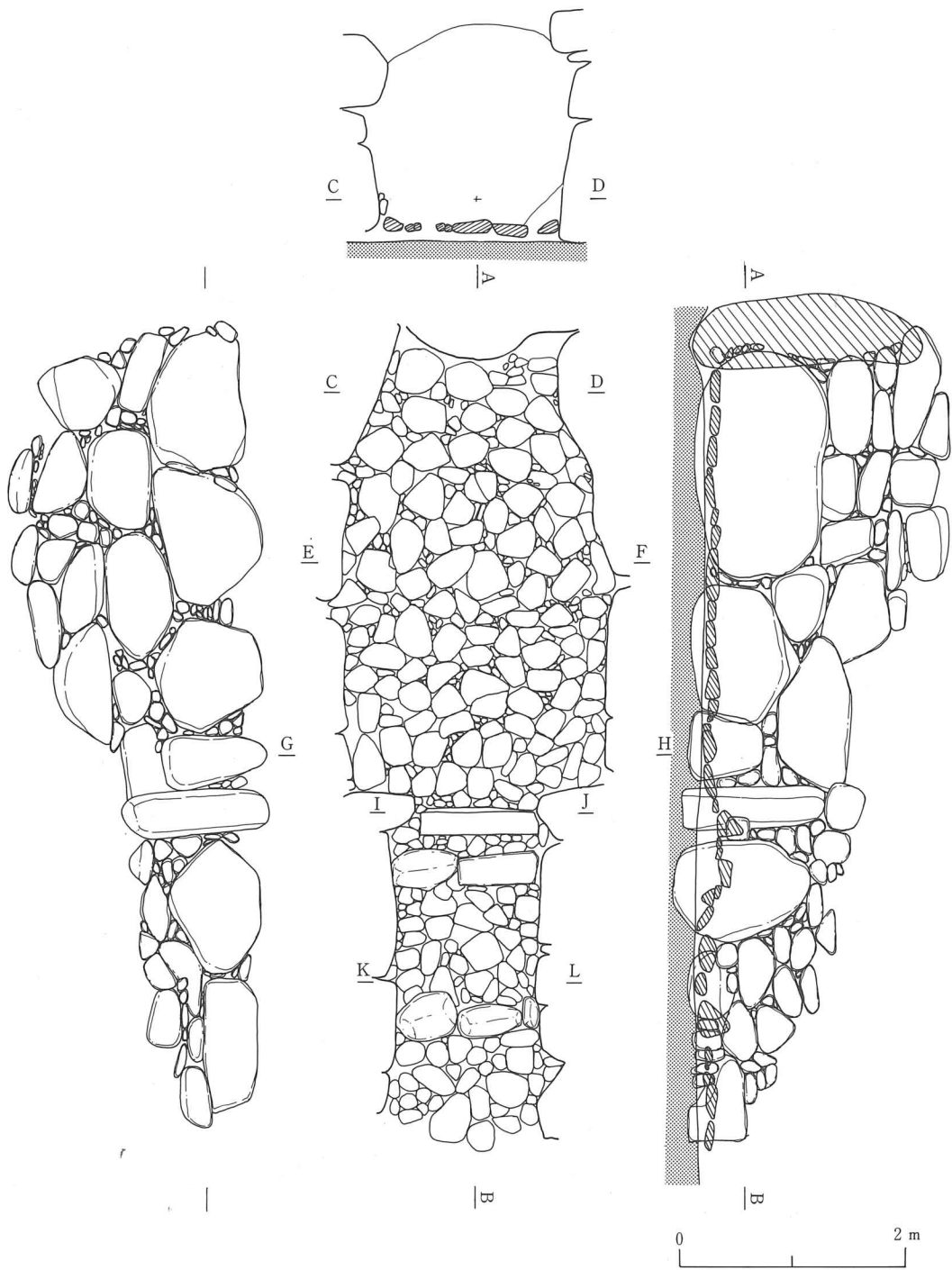
玄室の側壁は、根石に最大幅2m、厚さ1.15mの巨石を中心に、平均幅1.2m、高さ0.95mの巨



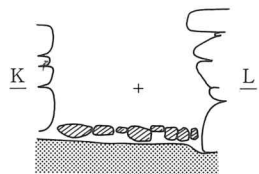
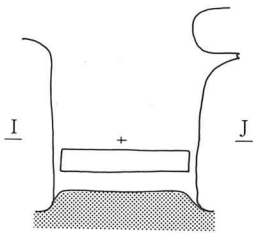
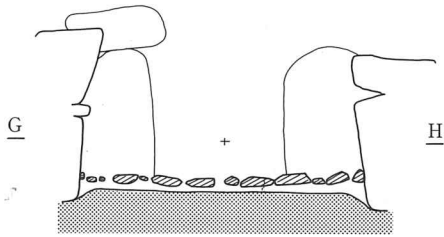
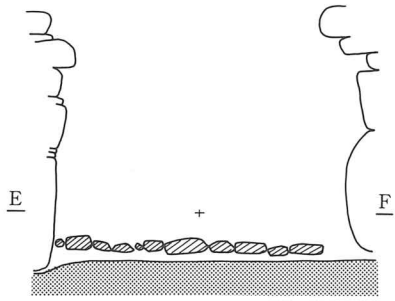
第3図 大塚第3号古墳墳丘実測図(1:80)



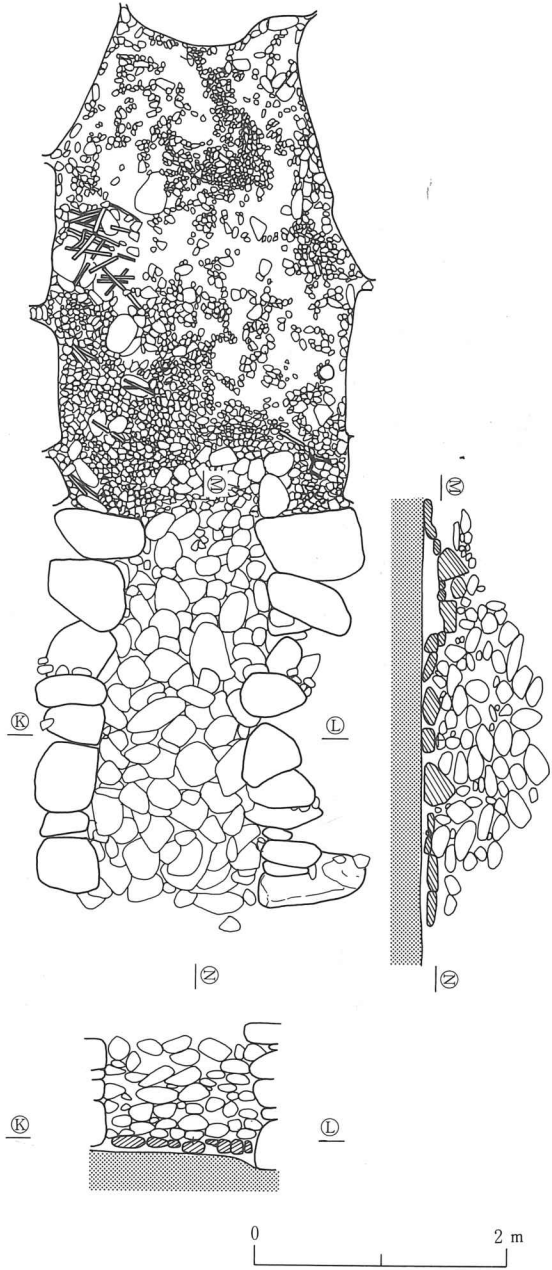
第4図 大塚第3号古墳墳丘断面図 (1:120)



第5図 大塚第3号古墳石室実測図〈16頁一部含む〉(1:60)



(前頁からつづく)



第6図 大塚第3号古墳閉塞実測図 (1 : 60)

石が小口状ないし横積み状に組まれ、2段目からは根石程ではないがやはりそれに匹敵するような大きな石を積み上げてあり、多くは横積みである。さらに、巨石の隙間には、河原の小礫が詰められており、本来はさらに密に構築されていたものと思われる。

積み上げ方法は、上部がせりだすもちおくり式の構造になっており、胴張りの玄室構造とあいまって、玄室全体を広く見せるための工夫がなされている。

羨道部の側壁も、大きな変化は見られないが、基本的にはもちおくり式の積み上げ構造になっている。

玄門は、東側の玄門で地山からの高さ1.25m、幅0.6m以上の巨石を使用し、西側は1.3m、幅0.7m以上の巨石を立てて構築していた。

羨門は、後世による破壊によってすでに存在しておらず検出することはできなかった。

床面は、構築の変遷の項で詳しく記述するが、玄室において基本的には地山上に偏平の河原石を敷き、その上に河原の砂混じりの小礫を敷いて床を構築している。しかし、石室内部が二次的に破壊を受けており、その時に床面まで大部分が影響を受けており、敷いた小礫が均一な状態では検出されていない。羨道部の床は、偏平な河原石を敷いているのは玄室と同様であったが、小礫が敷かれた状況は見られなかった。

玄門部と羨道中央部の2か所に框石が置かれていた。玄門部に置かれたものは2個で、一つは長さ1.05m、幅0.2mを測り、ほぼ両側の玄門いっぱいまで届く安山岩の一枚石を使用しており、もう一つはその框石より南に僅かにずれた所に位置しており、長さ1.28m、幅0.28mを測り、やはり安山岩の一枚石と河原石の2個を並列して使用していた。羨道部中央に位置する框石は、人頭大の河原石を3個横に並べて置かれており、玄門部の框石とは様相を異にしている。

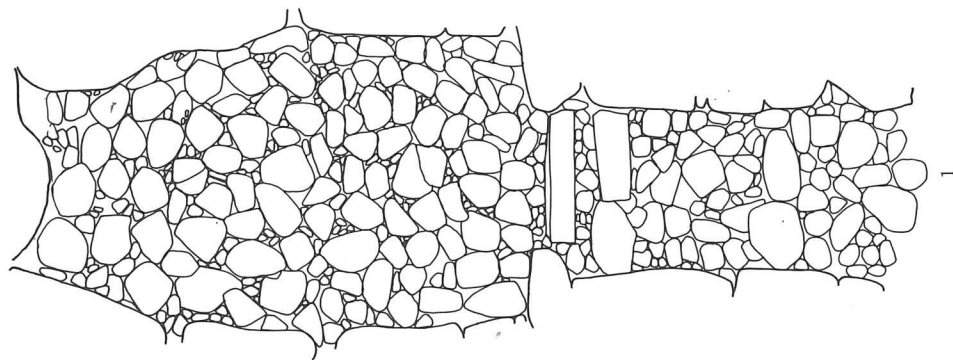
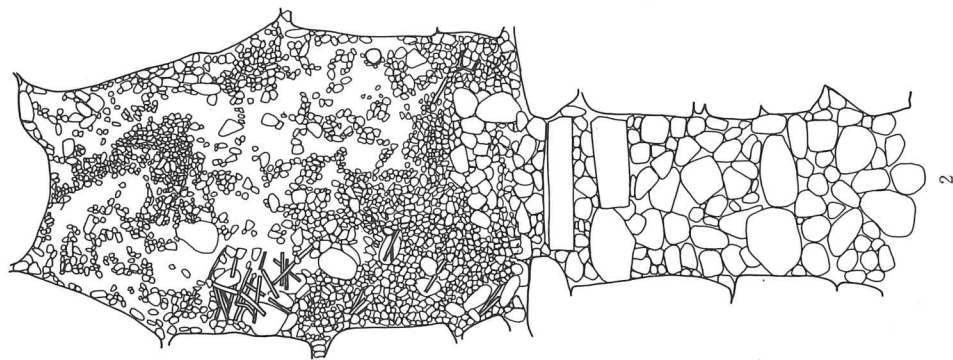
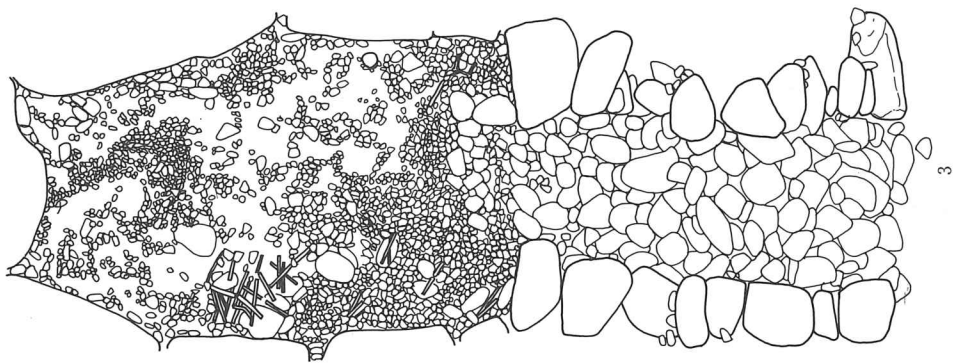
閉塞は、床面から残された羨道部側壁上端まで良好に残されており、上部は取り除かれた側壁とともに取られてしまったものと思われる。礫は比較的丸みを帯びた人頭大の河原石を使っており、現状では黒色土が隙間に入り込んだ状態であったが、構築段階では礫だけで閉塞していたものと思われる。

2、石室構築の手順と変遷（第7図）

第一段階は、整地した上に奥壁を置き、奥壁を基準にしながら側壁の根石を置くことによって始まる。そして、玄門を置くことによって玄室の規模が決まる。玄門から羨道部の側壁の根石を置き、羨門で羨道の規模が確定する。整地した地盤は、黄色ローム層のいわゆる地山である。そして根石は、裏詰石によって固定している。

第二段階は、根石の上に側壁石を積み重ね、最後に天井石を載せる段階である。側壁石は、隙間に河原石を詰めたり裏詰石で支えたりしながら積み重ね、最後は天井石の重さで全体を支えたものと思われる。

盛土は、恐らく側壁石を積み上げていく段階で順次行なっていったはずである。盛土を利用し



第7图 大塚第3号古墳床面構築変遷図 (1:60)

なければ側壁石を上を引き上げることは不可能であったと思われる。天井石が載った後は、墳丘全体にさらに盛土をし、最後に葺石をして土が崩れないように全体を固めたものと思われる。

第三段階は、床面の構築である。玄室及び羨道全体の地山上に偏平な河原石を密に敷き並べ、さらに隙間には適当な小礫が詰められる。そして、玄室に限りこの上に砂混じりの河原の小礫が敷かれ床面が完成している。

その後は、遺体を埋葬して副葬品を置き、羨道部に河原石を詰めて閉塞している。そして、閉塞部に対しても、土を盛って全体を覆っていたものと思われる。

本古墳は、人骨の詳細な分析によって「最少二個体」が埋葬されていたという調査結果（第4節）が得られており、追葬が行なわれていたという形跡を示していることから、再び閉塞を取り除き遺体を再埋葬してから再び閉塞をして盛土したものと思われる。

第3節 出土遺物

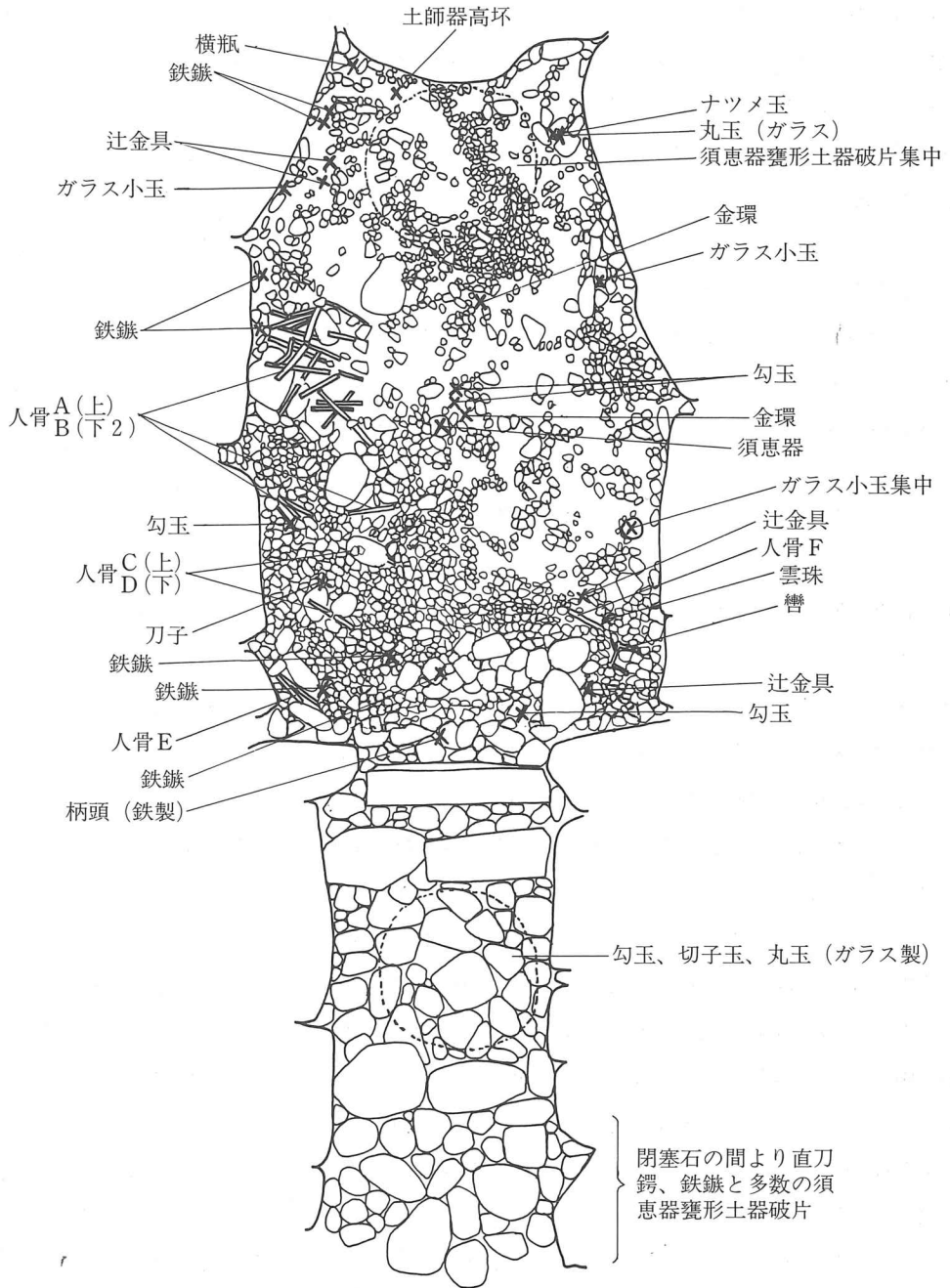
1、遺物の出土状態（第8図、第九・十図版）

本古墳から出土した遺物は、A：土器類 土師器の高坏、須恵器の甕形土器・坏（碗）・甗・横瓶・埴瓶、B：装飾品 勾玉・切子玉・ナツメ玉・丸玉・白玉・小玉・ガラス小玉・金環、C：武器 鏢・柄頭・鞘金具・鉄鏃・鎧状鉄製品、D：生活具 刀子、E：馬具 轡・雲珠・辻金具、F：その他の出土遺物 縄文土器・石器が出土しており、攪乱され遺物がすでに持ち出された古墳にしては種類も多く、また、多数出土した。尚、縄文時代の出土遺物は少量なので、本章で取り扱うことにした。

人骨の出土した位置は、玄室のいずれも床面上からであり、東壁の玄門付近に一か所出土している他はすべて西壁際に点在しており、特に集中していたのは中央部よりやや奥壁に寄った西壁際であり、頭蓋骨や下顎とともにさまざまな種類の骨が存在していた。これらの出土状況は、追葬段階において西壁に寄せられたあり方を示しているといえるが、中央部に追葬した人骨が存在していないことが疑問であり、近年における攪乱と何らかの関係があるのだろうか。

副葬品の出土位置は、本来中央部に遺体が埋葬されていたことを考慮すれば、遺体の周囲を取り囲むように存在しているとみることができる。なかでも羨道入口付近の閉塞に混じって出土した1点の大型甕形土器を除けば、他の高坏や甕形土器・横瓶などの土器類は、奥壁直下すなわち頭の位置に全て集中して出土している。また、鉄鏃や直刀の鏢・太刀の柄頭など武器類は西側に集中し、勾玉や丸玉・ナツメ玉・ガラス小玉・金環など装飾品は東側に集中している。さらに、轡・雲珠・辻金具など馬具類は、東側の玄門付近に集中して出土している。

羨道部では、ほぼ中央部の東壁際に切子玉とメッキをしたガラスの丸玉、そして、勾玉が集中して出土しており、また、羨道部入口付近の閉塞とあいまって須恵器の大型甕形土器や直刀の鏢・鉄鏃等が出土している。



第 8 図 大塚第 3 号古墳出土遺物位置図 (1 : 60)

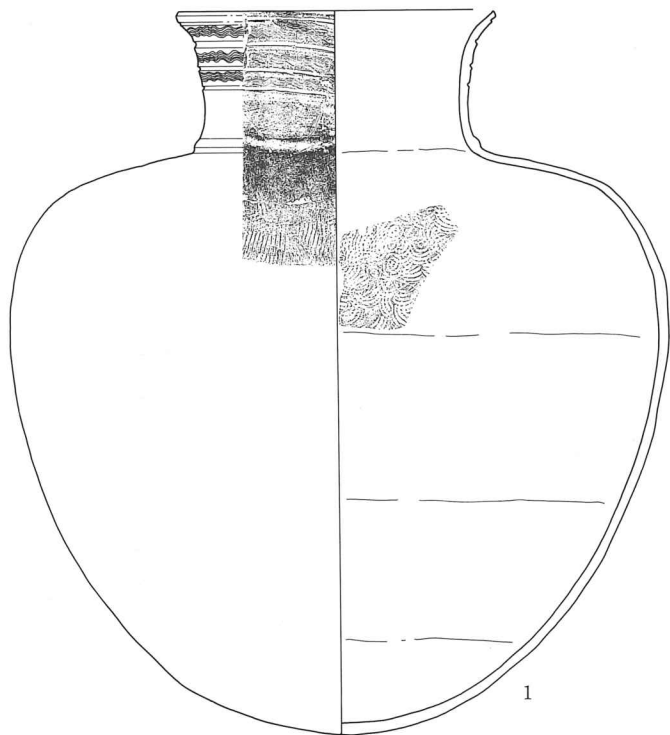
全体から見ると、それぞれの種類の遺物が乱立的に置かれている様子はなく、むしろ種類ごとに位置を定めて副葬している様子が見られる。ただし、追葬が行なわれ人骨が西壁際に寄せられていることも考慮しなくてはならず、従って、副葬品も当初の位置から動いていることも考慮しなければならないことは当然である。

2、出土遺物

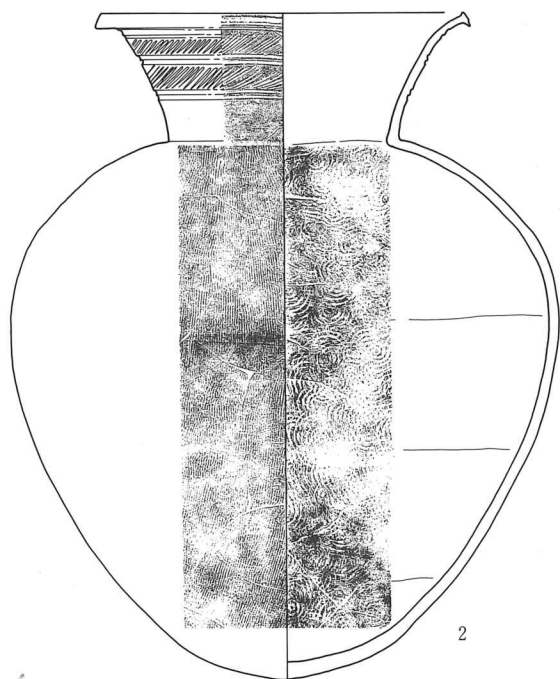
A：土器類（第9～11図、第十三図版）

古墳から出土する土器にしては、大型の土器が出土している。第9図1は、全体が破片の接合によって復元した資料である。口縁部直径42cm、高さ96cm、頸部の直径39cm、口縁部から頸部の立ち上がり18.5cm、胴部の最大径は頸部のやや下の所で87.5cm、器厚は5～6mmを測り、底部は丸底を呈している。口縁部には、一周する沈線に区切られた中に3段の櫛描波状文が施文されている。胴部はタタキ目が残り、内部は青海波文が全体に見られる。本資料は、羨道部入口付近の閉塞とあいまって出土している。第9図2は、口縁部直径42cm、高さ78cm、頸部の直径27cm、口縁部から頸部の立ち上がり15cm、胴部の最大径は頸部からやや下がった所で64cm、器厚は口縁部付近で6～7mm、最も厚い所は底部で2cmを測り、丸底を呈している。頸部から口縁部の形状は1ではほぼ垂直に立ち上がるのに対し、2はラッパ状（受口）に広がっている。口縁部には、やはり一周する沈線に区切られた中に3段の櫛描波状文が施文されている。胴部はタタキ目が残り、内部は青海波文が全体に見られる。制作過程における接合部が、口縁部と頸部で一か所、胴部で3か所確認することができる。

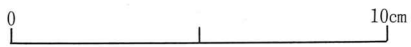
第10図1～3は、中型の須恵器の甕形土器である。1は、口縁部直径25.2cm、高さ43.7cm、頸部の直径16.5cm、口縁部から頸部の立ち上がり6cm、胴部の最大径は頸部の所で42.5cm、器厚は全体にほぼ均一であり6mmを測り、底部は丸底を呈している。口縁部には、一周する沈線に区切られた中に2段の櫛描波状文が施文されている。胴部はタタキ目が残り、内面は青海波文が全体に見られる。制作過程における接合部が、口縁部と頸部で一か所、胴部で2か所確認することができる。2は、口縁部直径20cm、高さ44.4cm、頸部の直径17.5cm、口縁部から頸部の立ち上がり38cm、胴部の最大径は頸部の所で45.8cm、器厚は0.6～0.8mmを測り、底部は丸底を呈している。口縁部はやや受口状に立ち上がっており、内面はロクロ成形痕が顕著である。胴部はタタキ目が残り、内面は青海波文が全体に見られる。制作過程における接合部が、口縁部と頸部で一か所、胴部で3か所確認することができる。3は、口縁部直径23.6cm、高さ46cm、頸部の直径12.4cm、口縁部から頸部の立ち上がり5.6cm、胴部の最大径は頸部の所で43.6cm、器厚は0.7mmを測り、底部は丸底を呈している。口縁部はラッパ状に開き、口唇はやや外反している。胴部はタタキ目が残り、全体にロクロ回転により渦巻き状に沈線が見られる。内部は本資料だけがタタキ目が見られない。制作過程における接合部が、口縁部と頸部で一か所、胴部で3か所確認することができる。



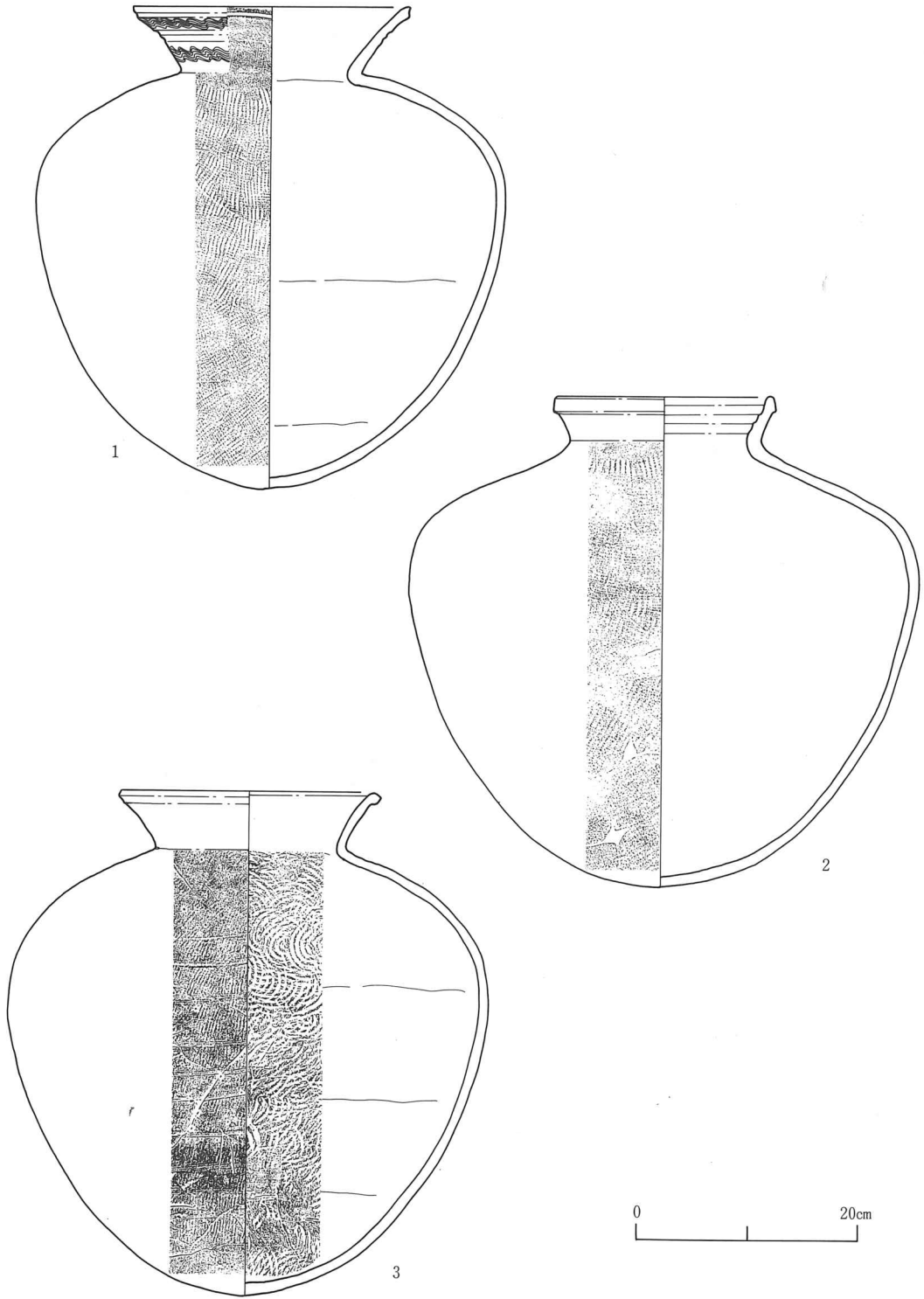
1



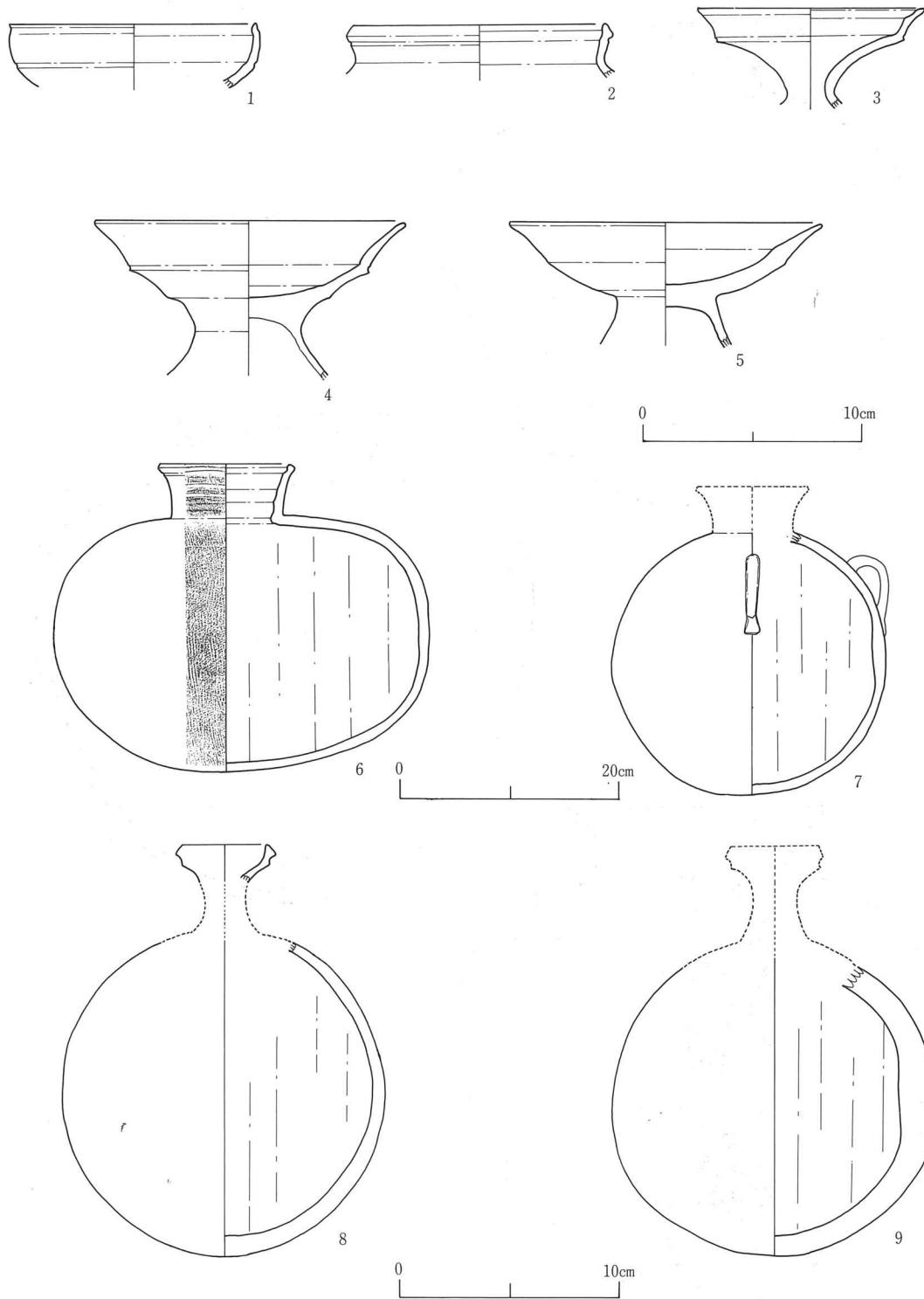
2



第9図 大塚第3号古墳出土遺物 (1:10)



第10図 大塚第3号古墳出土遺物 (1 : 6)



第11図 大塚第3号古墳出土遺物 1~5・8・9 (1:3)、6・7 (1:6)

第11図1は須恵器の坏(碗)型土器、2は短頸壺の口縁部、3は壺、4・5は土師器の高坏である。いずれも破片からの図上復元であるが、高坏は復元成形可能な良好な資料である。6は完形の横瓶で、口縁部直径12cm、高さ27.9cm、頸部の直径10cm、口縁部から頸部の立ち上がり5cm、胴部の最大径はほぼ中央部で34cm、器厚は口縁部から肩部で7mm、中央部で1~1.2cmを測る丸みを帯びた樽状の形態をなしている。表面全体には自然釉がみごとにかかり、光沢をなし焼成良好の資料である。7~9は埴瓶で、7は口縁部を欠くが、その他は全て整っている資料である。頸部から底部までの高さ28.7cmで、推定した口縁部の高さを含めるとおよそ28cm程になるのではないかと思われる。器厚は0.7~1cmを測る。肩部には一対の把手が付けられていたが、一つは破損している。尚、この把手の貼付位置は対称ではなく、かなりずれているのが特徴である。表面はタタキ目が顕著で、その上にガラス質の深い緑色の自然釉が厚く強烈にかかっており、ゴツゴツしている。内面はロクロ成形痕が顕著である。8と9は破片資料より図上復元した埴瓶である。8は口縁部資料とともに復元しており、推定の高さ18.5cm、胴部の直径14.7cm、器厚6~9mmと比較的厚い。胴部は深い緑色の自然釉がバランスよくかかりなめらかで、内部はロクロ成形痕が顕著である。9も同様な資料で、胴部の直径14.6cm、器厚は0.9~1.7cmを測り極めて厚く、内部はロクロ成形痕がかなり顕著である。

B：装飾品(口絵、第12・13図、第2表、第十一図版)

装飾品は、玉類と金環が出土しており、攪乱により持ち出された後の出土品としては非常に数が多い。第12図1~15は勾玉で、1~8が玄室出土、9~15が羨道出土である。石材は、7が碧玉製、8・15が水晶製でその他は全て瑪瑙製である。形態的には1と9が三日月形でその他はコの字形である。1は極めて太くて大型で、これだけ大きな勾玉は類例が少ない。

第12図16~19は、羨道出土の水晶製の切子玉で合計4個出土した。水晶の六面体を利用して六角形に磨きかけられている。中央部には貫通孔が開けられており、そこに水銀珠が塗られ、水晶の天然の透明な輝きをより強調する意図がみられる。

第12図20は、琥珀製のナツメ玉である。合計2点出土しているが非常にもろく、図示は1点しかできなかった。

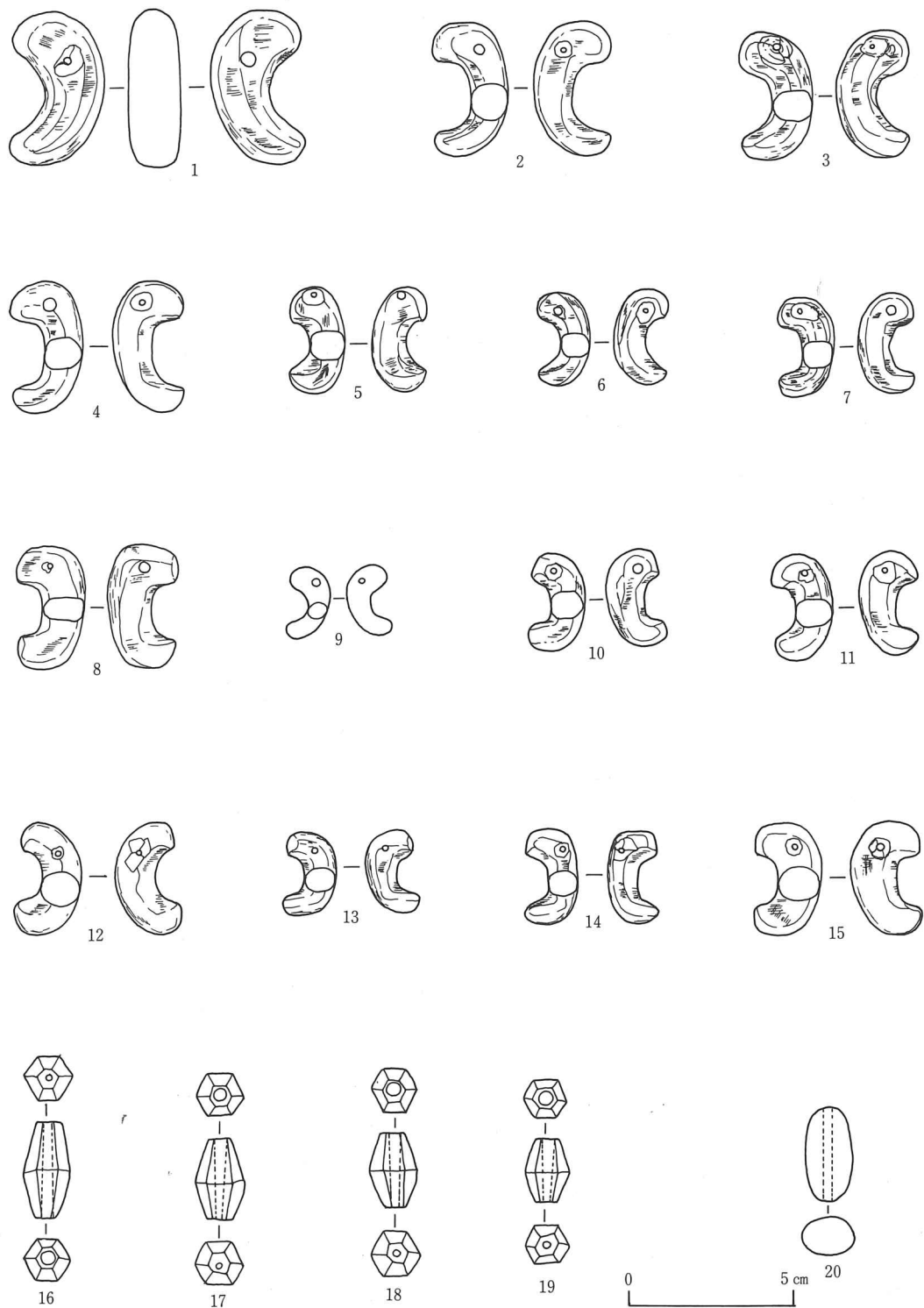
第13図1~13は、玄室出土の丸玉である。1は翡翠製、2~6・8は滑石製、9~13はガラス製である。形状は球形で、大きさもほぼ均一であり全体が丁寧に磨かれている。14~19は滑石製の白玉であり、白玉にしては全体が光沢の出るまで丁寧に磨かれている。20は玄室出土、21~31は羨道出土のガラス玉である。21~24は緑色をしており、全体にガラス質で白色のメッキがされている。その他はメッキはなく、濃い青色(紺色)をしている。

第13図32~36は金環である。32は比較的大型であるが、その他は小型である。いずれも青銅にアガルガム法による金メッキがなされていたもので、32と35は金が明瞭に残っている。

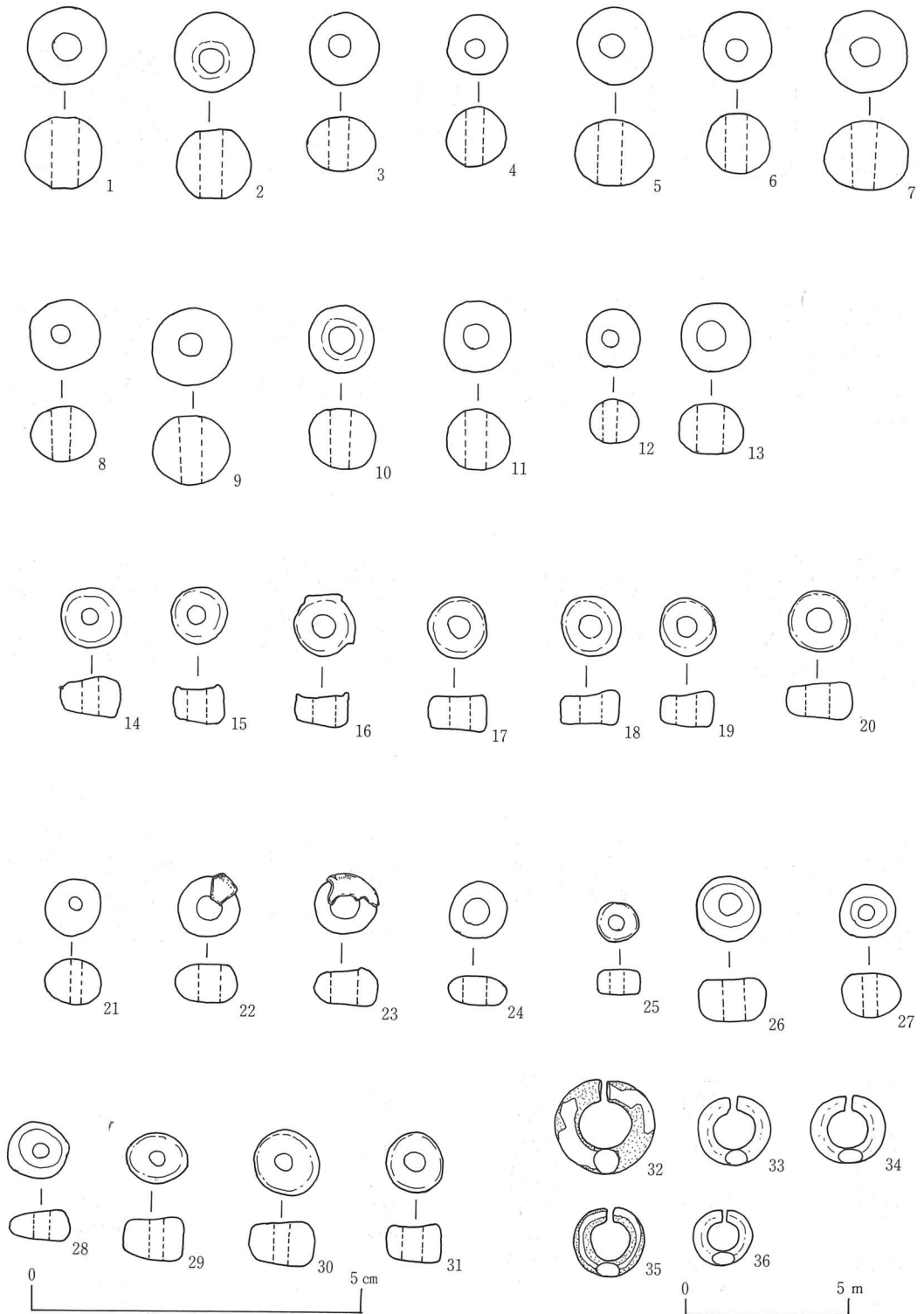
口絵1はガラス小玉で、出土点数は416点と非常に多い。大きさは3~4mmと極めて小さいため

第2表 大塚第3号古墳出土装飾品計測表

挿図番号	種別	長径	幅径	厚径	材質	挿図番号	種別	長径	幅径	厚径	材質
12-1	勾玉	4.7	1.8	1.6	瑪瑙	13-10	丸玉	0.9	—	1.0	ガラス
12-2	〃	4.0	1.1	1.1	〃	13-11	〃	0.9	—	1.0	〃
12-3	〃	3.8	1.2	0.9	〃	13-12	〃	0.7	—	0.8	〃
12-4	〃	3.9	1.1	0.9	〃	13-13	〃	0.8	—	1.0	〃
12-5	〃	3.2	1.0	0.8	〃	13-14	白玉	0.6	—	0.9	滑石
12-6	〃	2.8	0.9	0.7	〃	13-15	〃	0.6	—	0.8	〃
12-7	〃	3.0	0.9	0.8	碧玉	13-16	〃	0.5	—	0.9	〃
12-8	〃	3.7	1.2	0.7	水晶	13-17	〃	0.6	—	0.9	〃
12-9	〃	2.1	0.6	0.5	瑪瑙	13-18	〃	0.5	—	0.9	〃
12-10	〃	3.0	1.0	0.8	〃	13-19	〃	0.5	—	0.8	〃
12-11	〃	3.2	1.1	0.8	〃	13-20	〃	0.6	—	1.0	ガラス
12-12	〃	3.4	1.2	1.0	〃	13-21	丸小玉	0.7	—	0.8	〃
12-13	〃	2.5	0.9	0.7	〃	13-22	白玉	0.6	—	0.9	〃
12-14	〃	2.9	0.9	0.7	〃	13-23	〃	0.6	—	1.0	〃
12-15	〃	3.4	1.3	1.0	水晶	13-24	〃	0.4	—	0.9	〃
12-16	切子玉	2.9	—	1.4	〃	13-25	〃	0.4	—	0.6	〃
12-17	〃	2.4	—	1.5	〃	13-26	〃	0.6	—	1.0	〃
12-18	〃	2.2	—	1.4	〃	13-27	〃	0.7	—	0.9	〃
12-19	〃	1.9	—	1.3	〃	13-28	〃	0.5	—	0.9	〃
12-20	ナツメ玉	2.9	1.6	1.1	琥珀	13-29	〃	0.7	—	0.9	〃
13-1	丸玉	1.1	—	1.2	翡翠	13-30	〃	0.7	—	1.0	〃
13-2	〃	1.0	—	1.1	滑石	13-31	〃	0.6	—	0.8	〃
13-3	〃	0.8	—	1.0	〃	13-32	金環	2.9	3.0	0.8	青銅+金
13-4	〃	0.9	—	0.9	〃	13-33	〃	2.1	2.2	0.5	〃
13-5	〃	1.0	—	1.2	〃	13-34	〃	2.1	2.3	0.4	〃
13-6	〃	0.9	—	1.0	〃	13-35	〃	2.2	2.1	0.5	〃
13-7	〃	1.0	—	1.3	チャート	13-36	〃	1.7	1.7	0.4	〃
13-8	〃	0.8	—	1.0	滑石	口絵	ガラス小玉	計416点			ガラス
13-9	〃	1.0	—	1.1	ガラス						



第12图 大塚第3号古墳出土遺物 (1:2)



第13图 大塚第3号古墳出土遺物 1~31 (1:1)、32~36 (1:2)

図示しなかった。出土状況のところで記述したが、玄室の東壁直下のほぼ中央部に100点以上ま
まって出土した箇所があり、腕輪ないし首飾りなどのような装飾品が置かれていた可能性を想起
させるが、玄室内に点在していたガラス小玉はここから何らかのかたちで拡散したのではないか
と思われる。形態はドーナツ状で、中央に貫通孔がある。色は、草色や緑色・水色・青色・紺色
などがある。

C：武具（第14図・第15図1～8、第3表、第十一図版）

武具関係は、第14図1～10の鉄鏃、第15図1は太刀ないし直刀の柄頭、3～5は直刀の鐔、6～8
は直刀の鯉口金具である。鉄鏃は、図示した10点の他に全て欠損しているが18点が出土しており、
合計25点を数える。先端が幅広の形態は1～3の3点だけであり、恐らくいずれも短頸造りでは
ないかと思われる。1は重抉造りである。8は先端が丸い造りであるが、その他は刀子形の片刃
造りになっている。先端が欠損している9と10もこのいずれかであったかと思われる。

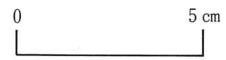
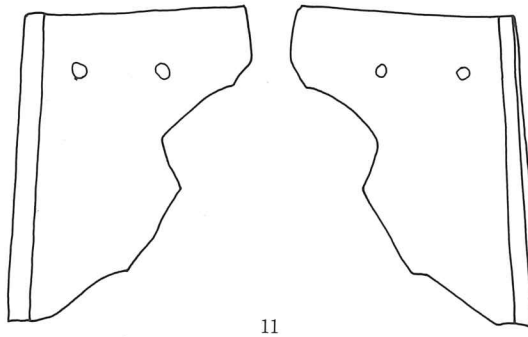
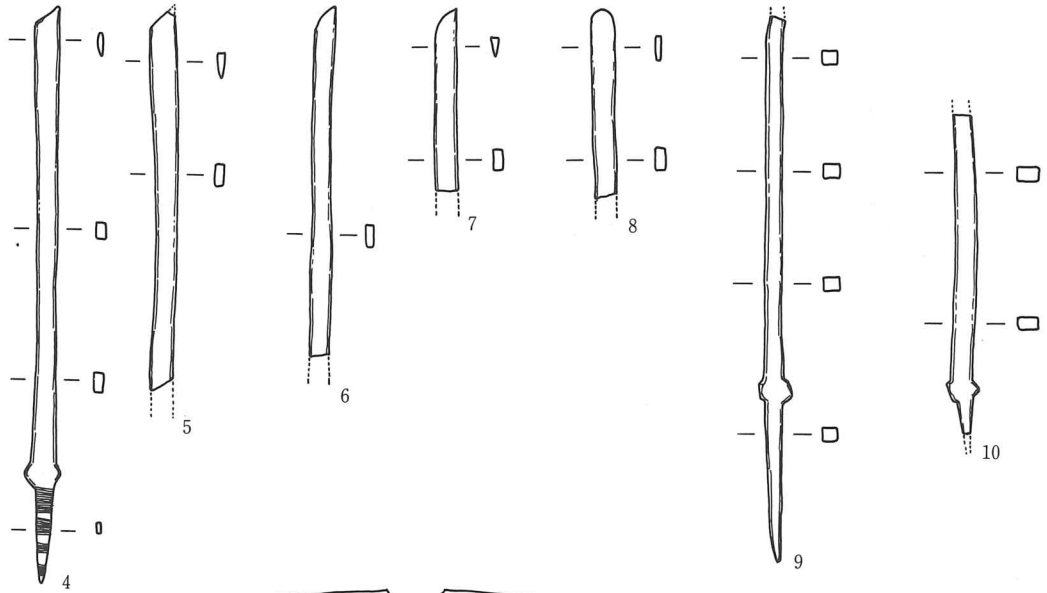
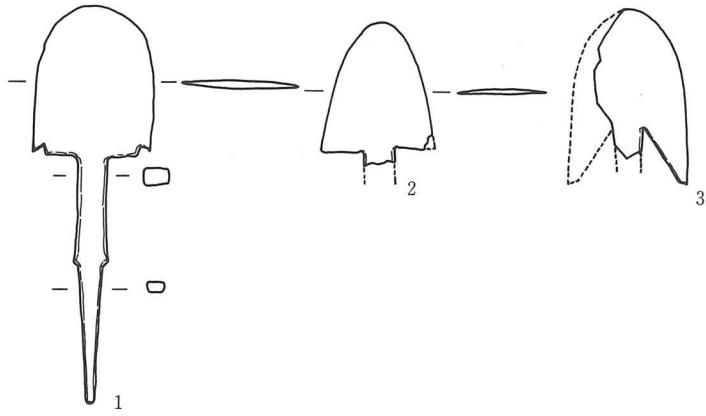
第15図1・2は柄頭である。1は青銅製で部分的に金メッキが残されている。長さ7cm、最大
幅3.5cmで、断面は偏平な楕円形をしておりかなり薄い。中央部に青銅製の釘の頭が残り、もう一
方の対称部には孔が開いている。2は、鉄製の柄頭である。長さ5cm、最大幅3.3cmで断面は偏平
な卵形をしており、比較的厚手でかなり重い。

第15図3～5は、直刀の鐔である。いずれも鉄製で、特に3は6.9cmと大きい。

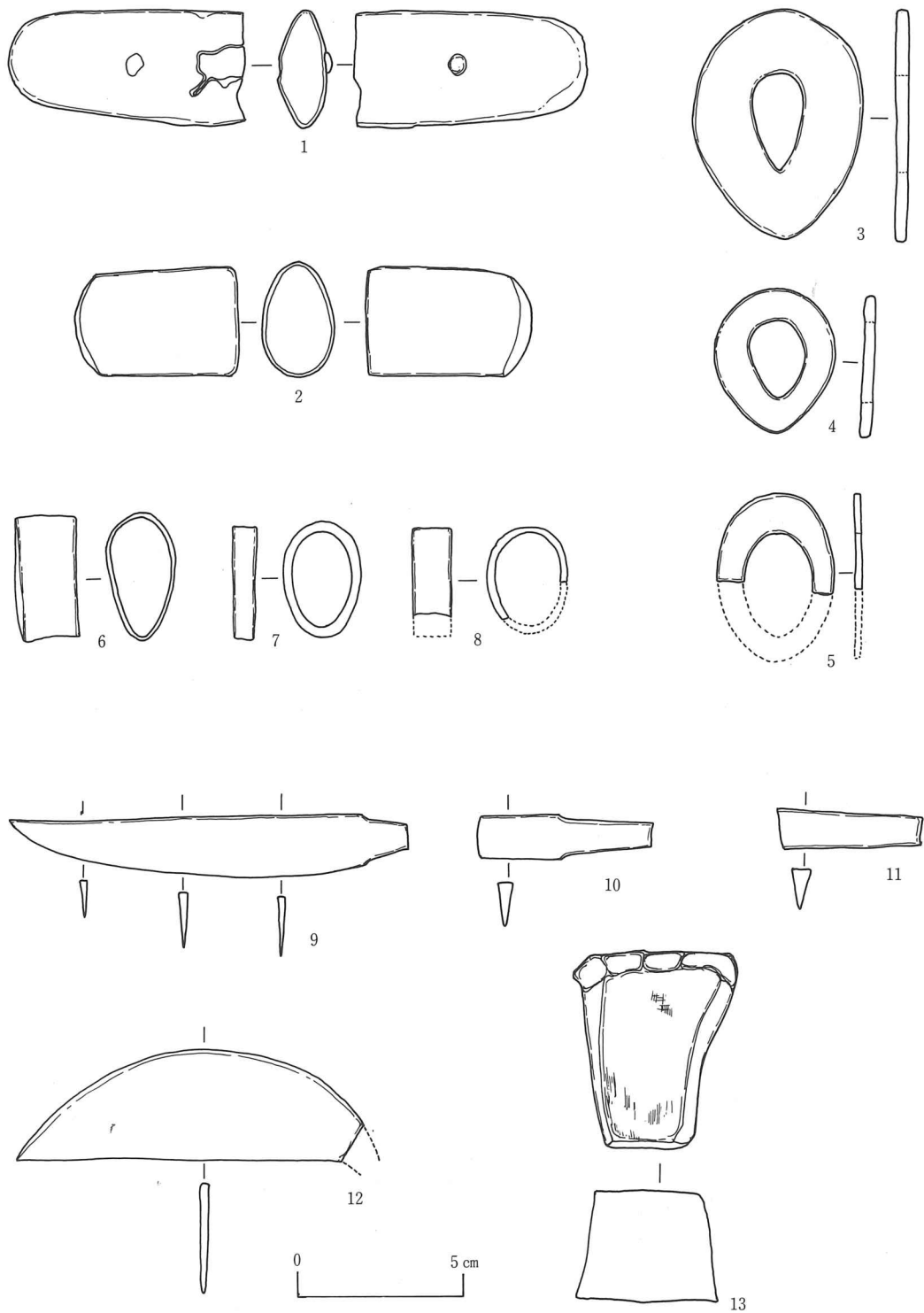
第15図6～8は直刀の鯉口で、いずれも鉄製である。

第3表 大塚第3号古墳出土刀子計測表

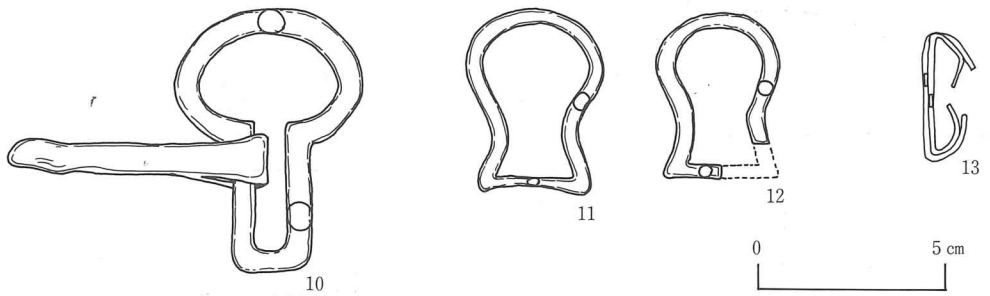
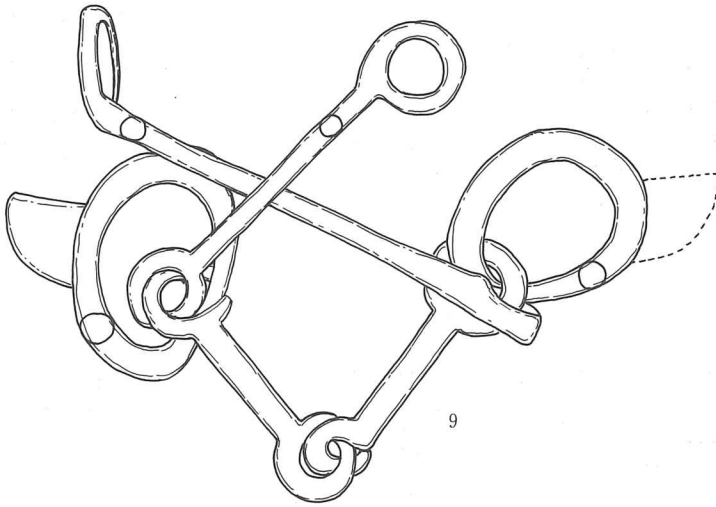
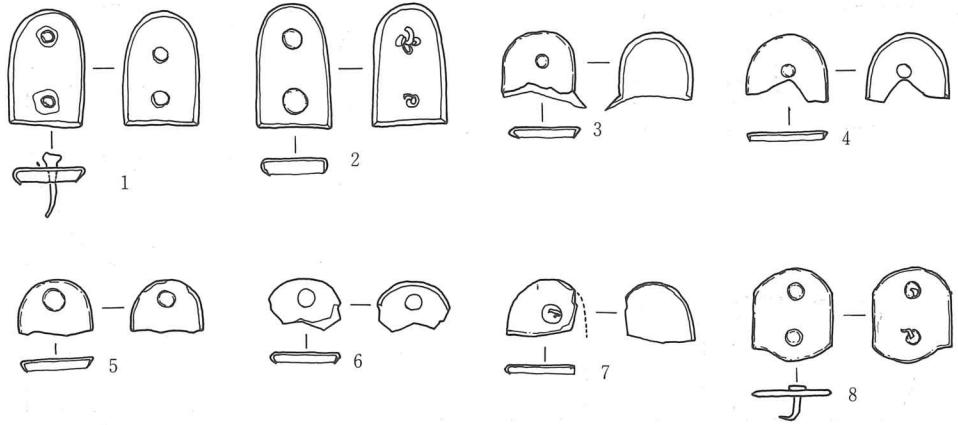
挿図番号	形態	全長	鏃身			鏃茎				説明
			身長	身幅	身厚	鏃被部		茎部		
						鏃被長	鏃被厚	茎長	茎厚	
14-1	短頸重抉両丸半円形式	10.5	4.0	3.1	0.3	2.9	0.7	3.6	0.4	完形で保存がよい
14-2	短頸棘鏃被両丸三角形式	—	3.2	3.0	0.2	—	—	—	—	茎部が欠損し、鏃身のみが残存
14-3	短頸重抉両丸造三角形式	—	4.6	3.2	—	—	—	—	—	鏃身の一部及び茎部が欠損
14-4	長頸棘鏃被切刃造片筒式	15.2	5.0	0.6	0.2	7.7	0.3	2.5	0.1	完形 茎部に繊維が残存
14-5	”	—	—	0.7	—	—	0.3	—	—	茎部が欠損
14-6	”	—	—	0.5	—	—	0.2	—	—	茎部が欠損
14-7	”	—	—	0.5	0.3	—	—	—	—	茎部が欠損
14-8	長頸棘鏃被平丸造柳葉式	—	—	0.6	0.3	—	—	—	—	茎部が欠損 本資料のみ刃部が丸造り
14-9	短頸重抉両丸半円形式	—	—	—	—	10.0	0.4	4.2	0.4	鏃身部欠損
14-10	”	—	—	—	—	—	0.6	—	0.6	鏃身部と茎部の先端が欠損



第14图 大塚第3号古墳出土遺物 (1:2)



第15图 大塚第3号古墳出土遺物 (1:2)



第16图 大塚第3号古墳出土遺物(1:2)

D：生活具（第15図9～11、第十一図版）

生活具として刀子を挙げたが、紙や紐などを切る道具として位置づけることができるものである。いずれも一般に出土するものに較べると大型で、9は茎部が欠損しているが現状で12cmを測り復元すれば16～17cmになるものと思われる。鋒は直線であるが、鋒から刃区まで刃先が反っているのが特徴である。12は小型の鎌で、刃部は直線で刃渡り10cmを測り鋒は丸みを帯びている。13は楔状の鉄塊であるが、名称不明の資料である。

E：馬具（第16図、第十二図版）

1～8は辻金具である。いずれも台は鉄製で、そこに金メッキした薄い青銅を表側になる一方に張り、裏側に返しをして剥がれないように留めている。辻金具は通常先端が丸みを帯びた十字状になっているものが多く、4か所それぞれに2個ずつの釘が取り付けられている。鉄の腐食は激しいが、青銅と金メッキは良好である。9は鉄製の素環鏡板付の轡である。それぞれの部位は非常に太く、全体に大型である。腐食が激しく接点部は錆ついて離れない状態である。鏡板の一方は破損している。10～12は鉄製の帯金具である。大型であるので馬具として使用したものと思われる。13も帯金具などに付属する金具と思われる。図示できなかったが、これらの他に青銅に金メッキを施した雲珠や釘をともなう留め金具状の青銅製品の破損部などが幾つか出土している。

第4節 人 骨

1、人骨の保存状態（第8・17図、第十図版）

玄室内に埋葬された人骨は、大きく分けると6か所に点在するかたちで遺存していたが、おおむね玄門から奥壁に向かって左側（西側）の壁際に集中的であり、床面と理解できる偏平な河原石の上に敷き詰めた小礫の上部で検出された。特に西壁際のほぼ中央部に集中して検出されている。

人骨の保存状態は極めて劣悪で、一部の長骨部分が主として形状を保つ程度であり、さらに地表への露呈にともない多くは細片状になる状態であった。以下、分析可能な人骨について出土地点ごとに記述する。

西壁中央部の集中箇所出土人骨（第8図A）

歯：上・下顎骨はまったく腐朽し、各歯はすべて遊離して検出されている。ただし、集中して出土しているため一括資料としてみてよいと思われる。各歯の残存の状態もエナメル質の歯冠部分のみに限られ、歯根はほとんど欠失している。

切歯：上顎の中切歯1本、側切歯1本、小白歯2本、下顎の小白歯2本、大白歯3本、その他は若干の微細な破片として残る。

歯の咬耗の程度：切歯＝切縁に咬耗痕はほとんど認められない。ただし、側切歯の形状は特異である。切縁から唇側面にかけて面状に咬耗が進行し、中央部に大きく象牙質の露出が見られる。

小白歯＝各咬頭に咬耗はほとんど認められず、比較的尖鋭な形状を保っている。大白歯＝各歯のそれぞれの咬頭には僅かな進行の差異が生じているが、著しい咬耗は見られない。このうち1本の咬合面の各溝や窩は極めて明瞭で咬頭も鋭く、他の2本とは異なる形状とみなされる。側切歯と大白歯各1本の咬耗の相違は、他歯の形状と異なりそれぞれ別個体であろうかと推察されるものである。

胸骨：胸骨体の一部で下方の肋骨切痕の一部が残る。

肋骨：骨頭部分が1個。

寛骨：坐骨の小部分がかなりもろい骨質で、数点の細片となって残るのみである。

上腕骨：左 骨体の下半部分（現存長約8cm）がほぼ管状のまま残されている。滑車部など全てを欠くが、尺骨縁とともに比較的形状を保つ部位である。形態としては中等度の太さ・大きさであろうか。その他、前腕骨と見られる骨の骨体部分の細片などが残るが、剥落が著しく原形はほとんど残されていない。

大腿骨：①左 骨体の中央部分が断片状のやや大型片として残り、接合できればかなり長大であるが、骨表面の剥落が激しく崩壊が進み、変形・湾曲の程度が著しい。殿筋粗面や恥骨筋線の発達が認められる。②骨体部分が約8.5cm残り、湾曲が生じている。③骨体の中央部分の7.5cmの数個の小片で、かなり厚い緻密質を有する。④骨体の一部で変形や崩壊が著しいが、やや大型片として残り、それぞれの細片も含まれる。①を除き左右の識別は明確でない。

脛骨：①骨体の上半部分が約10.5cmのやや大型片として残るが、崩壊は進行している。ヒラメ筋線の一部などが推定できる程度である。②骨体の中央部で前稜を首に残し、内外の側面部分などの他の細片とともに一括される。かなり厚い緻密質である。

西壁中央部南側出土人骨（第8図B）

上腕骨：左 骨体の下部が9cmの長さで、管状のまま残る。橈側縁はかなり発達した稜状である。前記Aの上腕骨（左）の白色で粗ぞうなもろい骨質に較べて、骨の表面は緻密・滑沢であり全体としての形態もやや大型といえよう。

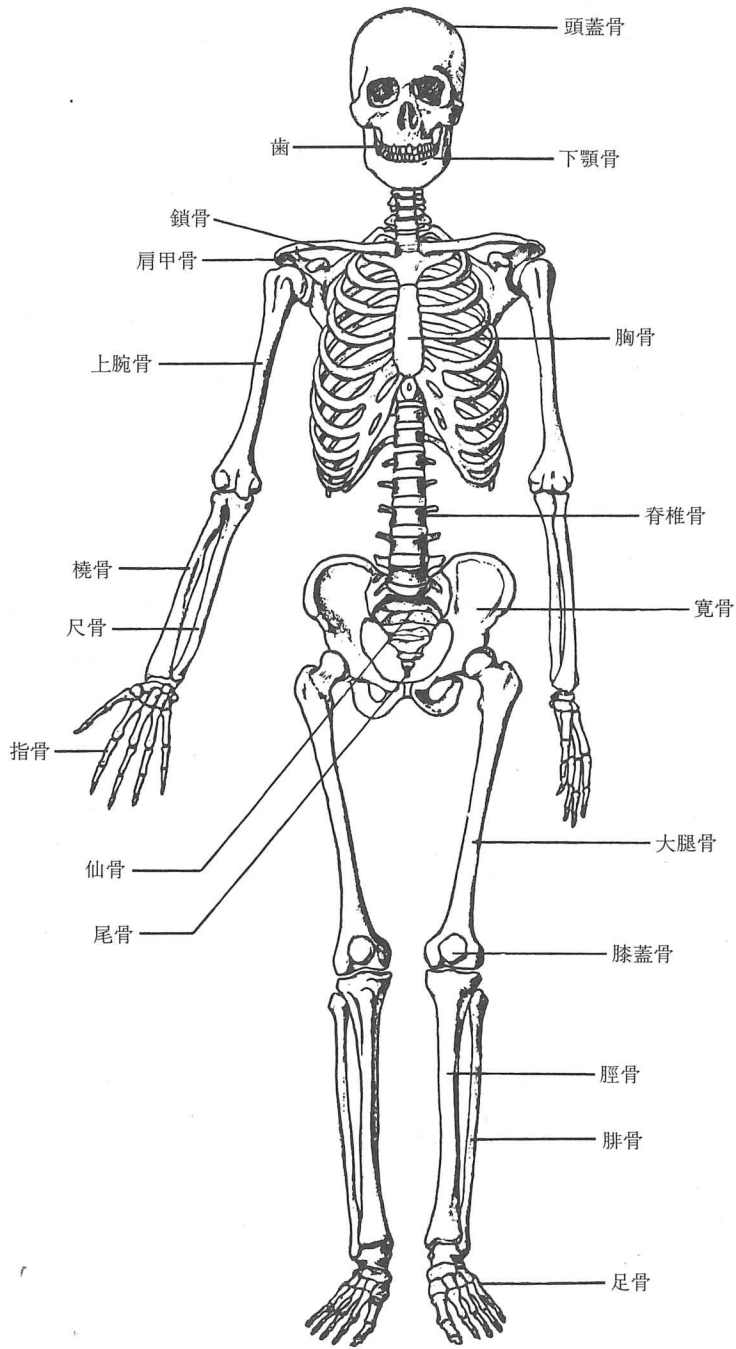
寛骨：腸骨稜や坐骨体の一部が認められる。

西壁中央部南側出土人骨（第8図C）

頭蓋骨：側頭骨の椎体部分（左・右）の一部が残り、同一頭蓋とみられる薄い板状の骨片（側頭窩部分？）も認められる。

大腿骨：骨体の上方部分が約7.3cmの半截状で残る。

脛骨：骨体の中央部分が約9.5cmの半截状で残る。



第17圖 大塚第3号古墳出土人骨部位参考圖

西壁南側出土人骨（第8図D）

大腿骨：細小な骨片が3点程残るのみである。

西壁南側出土人骨（第8図E）

大腿骨：骨体の全面の一部（最長8.5cm）の細片で、厚い緻密質を有する。

東壁南側出土人骨（第8図F）

大腿骨：左 断片状であるが接合により全長17cm程の骨体となる。骨体の後面で殿筋粗面の発達は弱度であり、粗線も中等度であるなどが観察される程度である。

脛骨：左 骨体の中央部分が約9.5cmの長さを保つ。他に細片が僅かに残る。

2、埋葬人骨の所見

残存する各部の人骨は極めて保存が悪く、その形態を残すものは皆無であり、さらに頭蓋骨や骨格を通じての各長骨の関節の結合や方向性なども、まったく不規則で四散した状態である。晒骨化した骨の主な部位が、何らかの理由により一か所へ移動・集積された二次的な結果とみなすことができよう。

骨の部位が指摘できるのは、歯をはじめとして主に上腕骨・大腿骨・脛骨などの骨格中の長大な部位の一部に限られ、その他の部位は僅かに痕跡を残すのみである。しかし、これらの骨は異なる性状を有する歯の存在や、個体差を示す上腕骨、部分的ではあるが複数の大腿骨の残存例から見て、最少二個体の混在を示唆するものと推定される。

骨の形質から観察できる人骨の性別・年齢などは、その特徴を表わす箇所がことごとく腐朽により消失しているのでまったく不明である。かろうじて歯の咬耗の程度からは、熟年に至らない壮年期の被葬者の存在が推測できるものである。

第5節 縄文時代の出土遺物

大塚第3号古墳の所在している地域は大塚遺跡として登録されており、かねてより縄文時代中期の遺物が出土している。本古墳は、大塚遺跡を削りながら構築されており、従って墳丘やその周辺部に縄文時代の遺物が散乱する状態で出土していた。

1、土器（第18図～第20図63～66図、第十四図版）

第18図1～7は前期後半期の神ノ木式併行期の土器である。1～5は斜縄文が施文されている資料で、2は羽状縄文のように見えるが、方向を異にして施文した斜縄文である。いずれも繊維はほとんど入っていない。6・7はいわゆる神ノ木式の特徴的な土器である。

第18図8～10は前期後半期の諸磯a式土器である。9は口縁部の資料で、口唇の直下に2本の横帯する細い隆帯を貼付し、隆帯ごとに一定方向の刻みを入れている。8は胴部の資料で、2本ないし3本をセットとした隆帯が、横帯あるいは斜めに貼付され、刻みが施文されている。

第19図11～25は中期後半期の縄文系及び唐草文系の土器である。11～14は縄文系の土器で、11は波状口縁をなし、唐草状の太い沈線と沈線の区画内に縄文が施文されている。12～14は胴部の資料で、沈線による区画と縄文により構成されている資料である。15～22は唐草文系の土器で綾杉状沈線文を基調にして文様構成がなされているものである。

23～25は中期後半期の土器を利用して制作した土製円板である。

第19図26・28～38は後期初頭の称名寺I式土器である。26は器面に対し沈線で区画される曲線文が全体に施文されている資料である。28～38は沈線による帯状の区画内に磨消縄文が施文されている。第19図39～62は後期前半の堀之内I式土器である。口縁部に縁帯文をもつ資料や沈線間に磨消縄文が施文されている資料、無文部土器の口縁部に刻みを入れた資料が出土している。

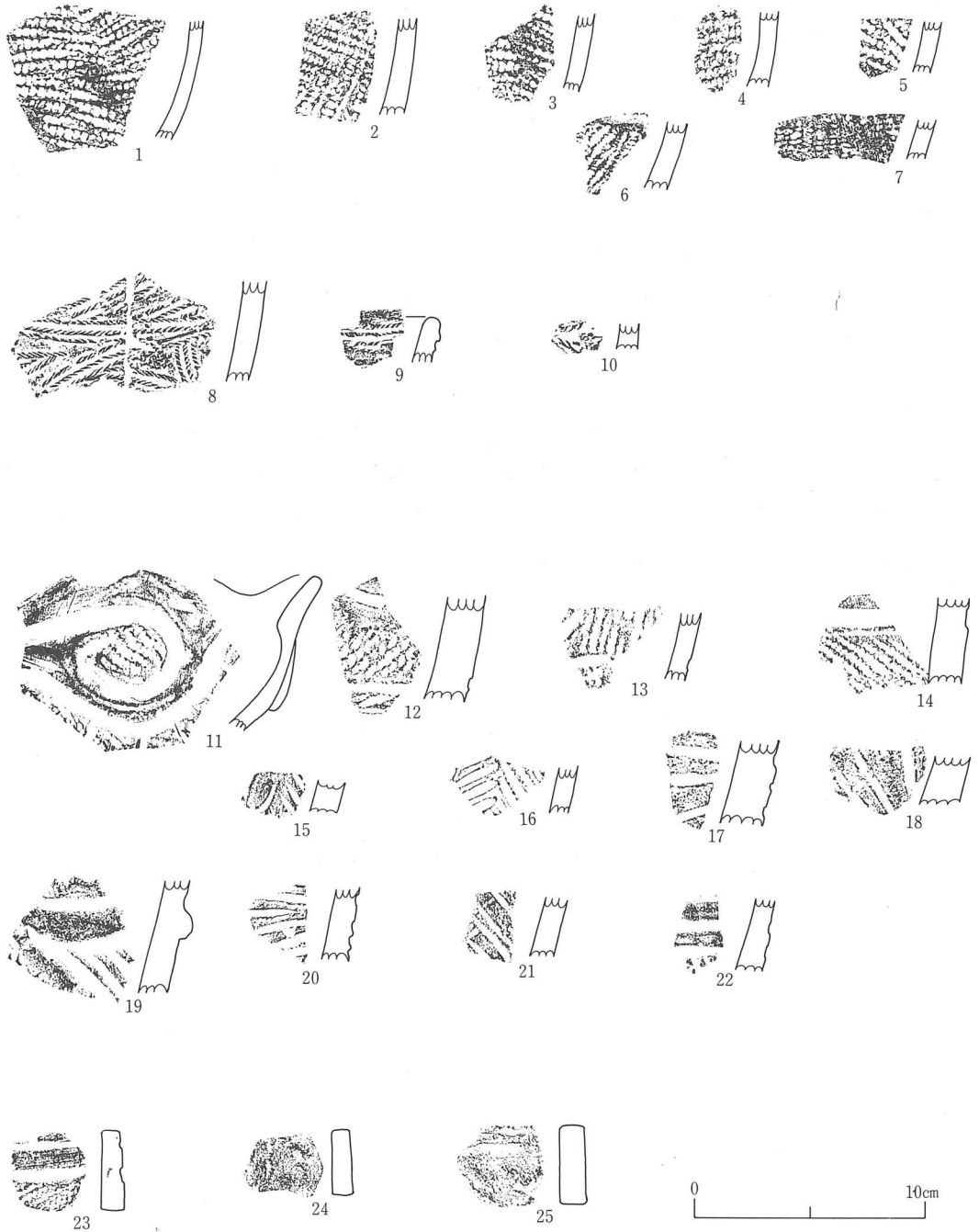
第20図63～66は後期後半の加曾利BII～III式土器である。63・64は、磨消縄文が基本に施文され横帯する沈線と64は上下の沈線により構成されている。65・66は突起状口縁の資料である。厚くて大型である。

2、石器（第20図67～72、第十四図版）

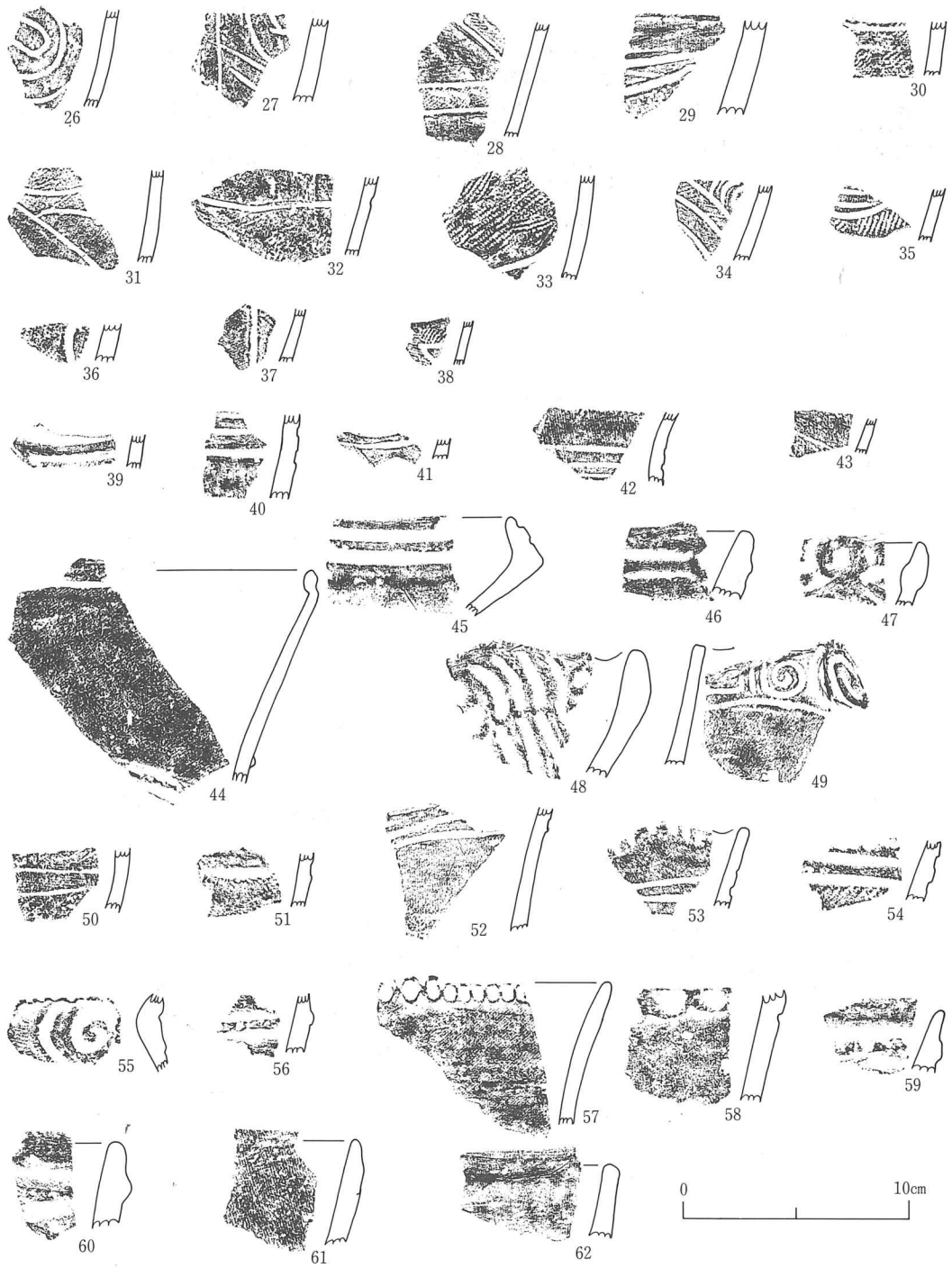
第20図67～70は打製石斧である。いずれも安山岩製で、68と70は自然表皮をそのままに残している資料である。69は刃部が一方に偏る斜刃であり、先端部に使用痕が明瞭に残っている。

第20図71は削器、72は石鏃である。いずれも黒曜石製である。

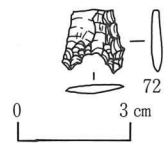
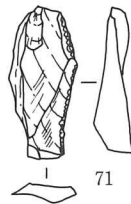
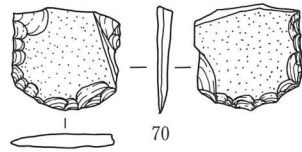
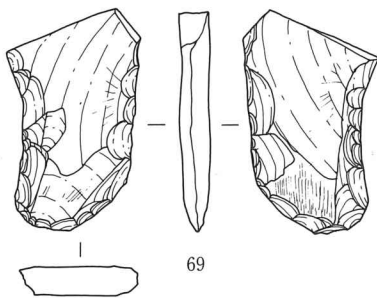
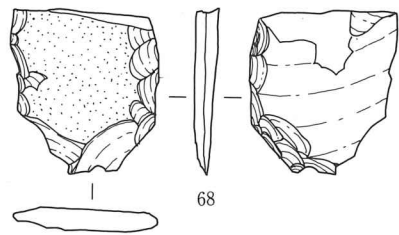
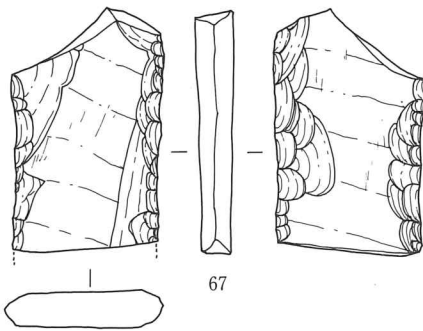
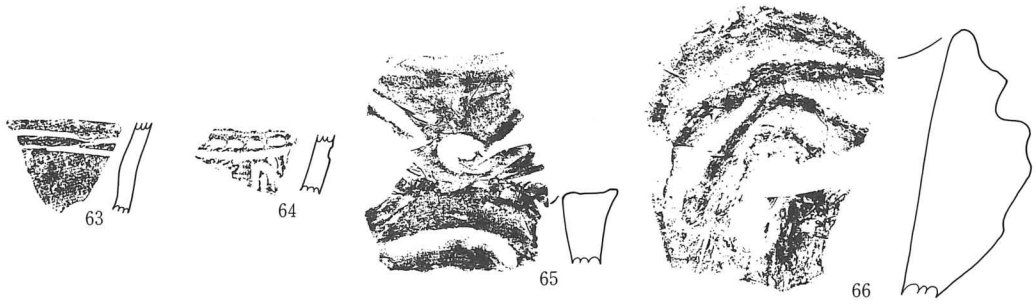
図示した他は、加工痕の残る黒曜石製の石器や剥片が30点程出土している。



第18図 大塚遺跡出土遺物 (1 : 3)



第19図 大塚遺跡出土遺物 (1 : 3)



第20図 大塚遺跡出土遺物 63~70 (1 : 3)、71・72 (1 : 2)

第V章 総括

大塚第3号古墳の発掘調査は、別章でも記述したように調査前に概観した様子とは異なって、遺構・遺物ともに極めて良好な状態で検出することができ、当地域では調査例が少ない古墳だけに非常に貴重な資料を提供したといえる。

これまでの古墳の発掘調査は、昭和36年に桑畑の造成にともなって破壊され、遺物を中心に現地調査が行なわれ、直刀19、小刀子2、刀装具20、馬具4、埴輪片4、鉄鏃53、勾玉7、管玉1、切子玉2、丸玉17、金環13、銀環1、金鈴2など合計127点の遺物が出土している。昭和57年度には真光寺第1号古墳の発掘調査が実施され、極めて良好な状態で石室構造が検出されるとともに、直刀1、刀子6、金環3、銀環1、土師器甕片1、フラスコ形長頸壺1が出土している。昭和55年度には大塚第1・2号古墳、尾崎第4号古墳の発掘調査が実施され、いずれもすでに破壊された古墳であり、根石ないし床の一部が検出されただけであったが、基本的な石室形態を確認することができたことは大きな成果であった。平成元年度には山ノ神第3・4号古墳の発掘調査が実施され、第3号古墳においては、半地下式の掘り方をもつみごとな石室構造が検出されるとともに、須恵器の坏・碗形土器、直刀3、鉄鏃127、刀子33（整っているもの4）、勾玉7、切子玉2、丸小玉2、ガラス小玉14、白玉2、金環2、雲珠1、辻金具8、轡1、鎧片1、帯金具2、留め金具（多数）、釘7、その他鉄製品、第4号古墳はかなり破壊が進行していたが、側壁の一部や床面が検出されるとともに、直刀2、刀子4、太刀の柄頭1、鉄鏃19、帯金具1、轡2、鎖状金属製品1、勾玉5、金環3、土師器の甕片1、須恵器の坏2、同甕1、手づくね土器1などが出土し、両古墳ともに大きな成果を上げることができた。

大塚第3号古墳の特徴は、石室に巨石を使用していることにある。巨石古墳の流れは、群馬県方面より佐久平に入ってきたと見られており、ここでその文化が展開するとともに、その影響は小諸市の耳取大塚古墳や浅科村の土合古墳でも見られ、そして7世紀後半期には大塚第3号古墳もその影響を受けているものと思われる。当地方における遺物の出土量の多さは、特徴的であり、他地域に較べ群を抜いている。調査地域は、八丁地川の中流から鹿曲川との合流地点に近い地域までの、いわゆる八丁地川水系に限られているが、横穴式石室をもつ佐久平の古墳の中では最も古い6世紀代の山ノ神第3号古墳や、同時期あるいはそれ以後に位置づけられる山ノ神第1・4号古墳、そして本古墳がその例で、武具・馬具・装飾品において特に目立っている。また、本古墳では、極めて大型の須恵器の甕形土器2点と中型の甕形土器2点、また横瓶1点や埴瓶2点など、これまではあまり見られなかった様相を呈している。

7世紀後半期は、大化改新の詔が発布され律令制度が開花する時であり、8世紀の大宝律令の成立に向けて社会制度が大きく変貌されようとしている矢先の時期である。これらの社会様相の中で本古墳は構築されており、中央と地方との関係の中でその結末を本古墳で見る思いがする。

参考文献

- 土屋長久 昭和45年「長野県北佐久郡望月町吹上山の神古墳について」(『信濃』III22-12)
- 上田市教育委員会 昭和51年「塚穴原第1号古墳発掘調査報告書」
- 望月町教育委員会 昭和55年「尾崎第4号古墳、大塚第1号・2号古墳緊急発掘調査報告書」
- 望月町教育委員会 昭和56年「望月町遺跡詳細分布調査報告書」
- 望月町教育委員会 昭和58年「真光寺第1号古墳緊急発掘調査報告書」
- 望月町教育委員会 平成2年「山ノ神A遺跡・山ノ神第3・4号古墳緊急発掘調査報告書」
- 望月町誌刊行会 平成6年『望月町誌』第三卷歴史編1(原始・古代・中世)付図
- 佐久市教育委員会 平成7年「寄山古墳緊急発掘調査報告書」

版 圖



大塚第3号古墳全景（西側）



大塚第3号古墳全景（東側）



床面の検出と閉塞



閉 塞



砂利敷床面下部の様子



墳丘と石室の様子

第四図版 遺構



石室の様子



玄門より玄室の様子



奥壁より羨道の様子



石室の様子



敷石を取り除いた石室の様子

第六図版 遺構



墳丘の様子（東側より）



奥壁裏側（北側）の構築状況



墳丘及び石室の構築状況



玄室東側の構築状況



墳丘A-Bトレンチ東側断面



墳丘A-Bトレンチ西側



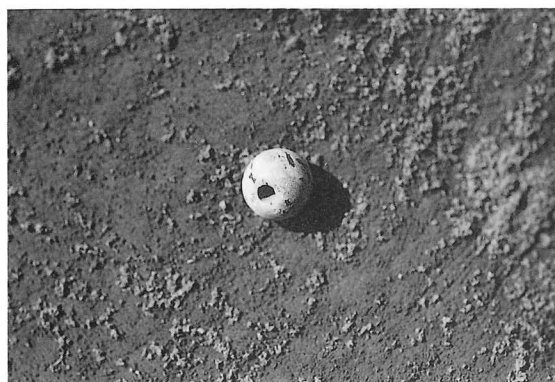
墳丘A-Bトレンチ西側断面



勾玉出土状態



勾玉出土状態



丸玉出土状態



金環出土状態



柄頭出土状態 (青銅製)

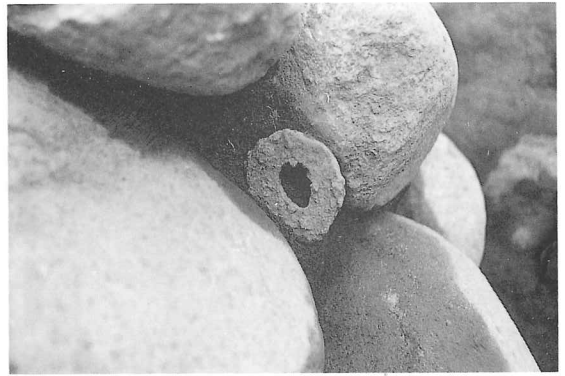


柄頭出土状態 (鉄製)

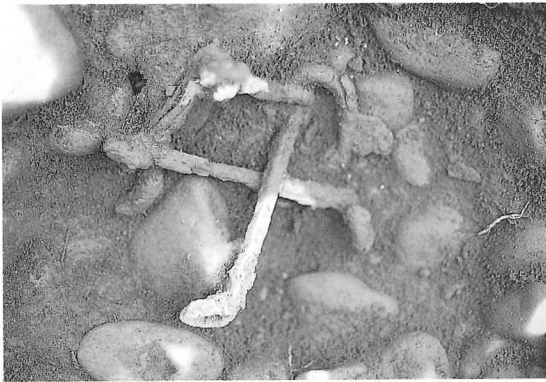
第十圖版 遺物



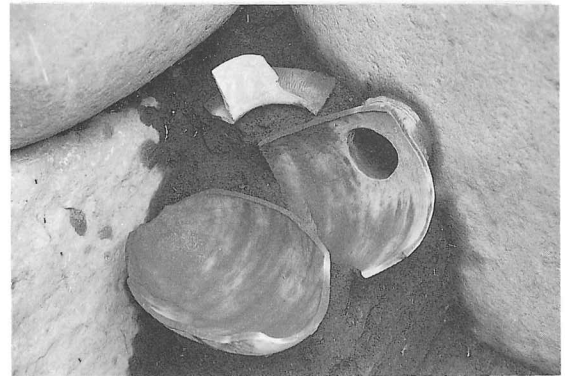
刀子出土狀態



鐳出土狀態



轡出土狀態



橫瓶出土狀態



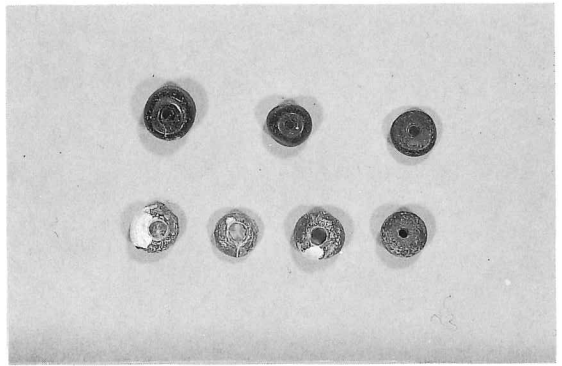
辻金具出土狀態



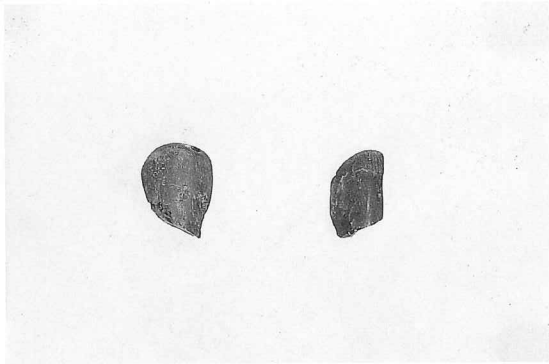
人骨出土狀態



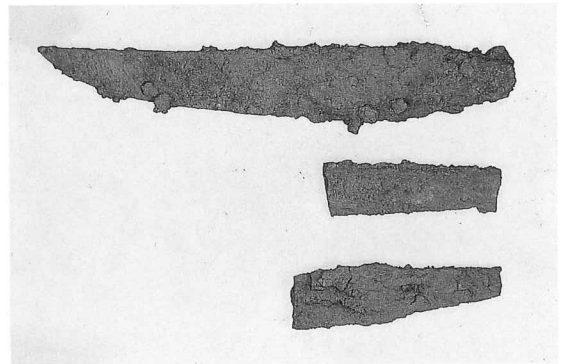
勾玉



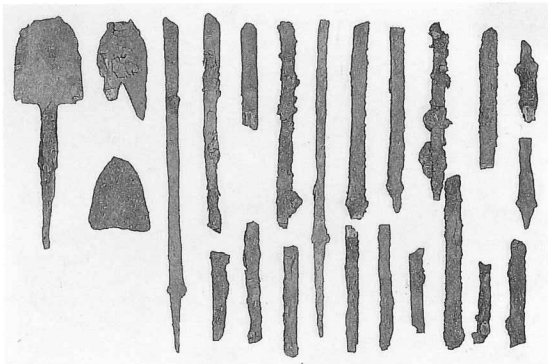
ガラス玉



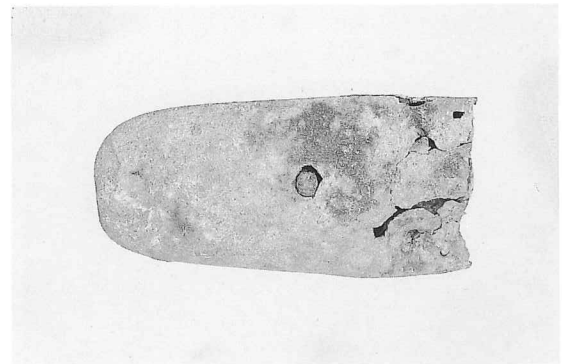
ナツメ玉



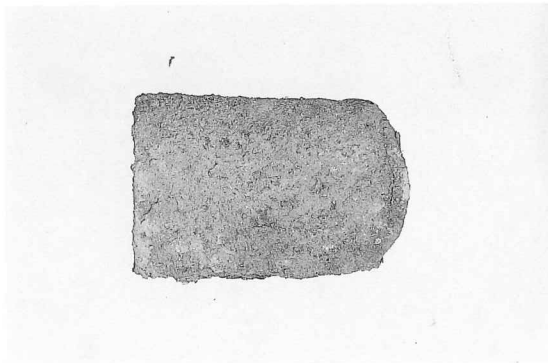
刀子



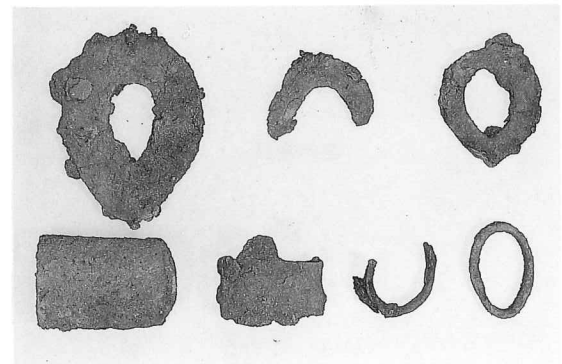
鉄 鍔



柄 頭

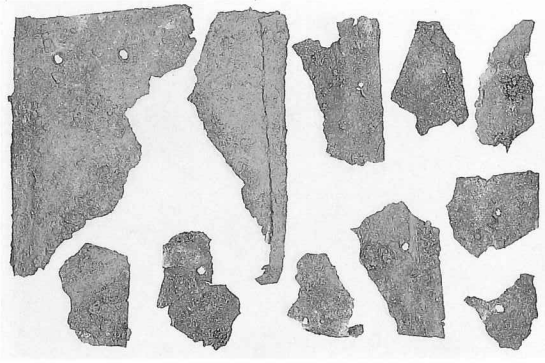


柄 頭

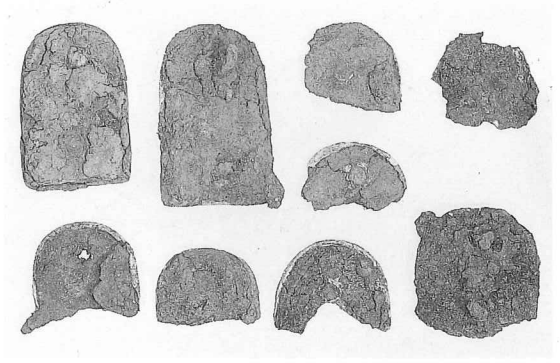


武 具

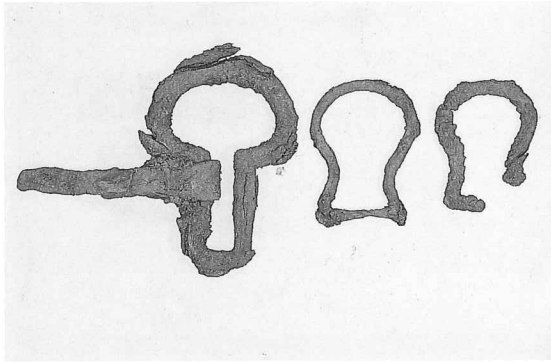
第十二図版 遺物



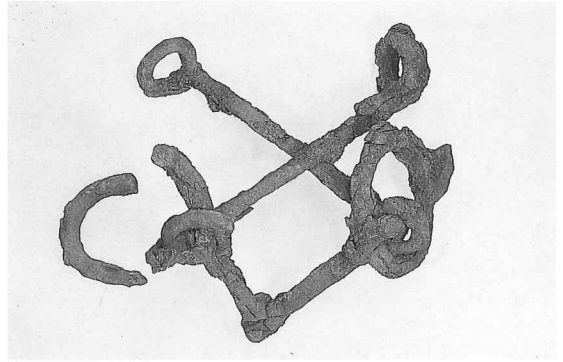
鎧状鉄製品



辻金具(裏面)〈表面は口絵に掲載〉



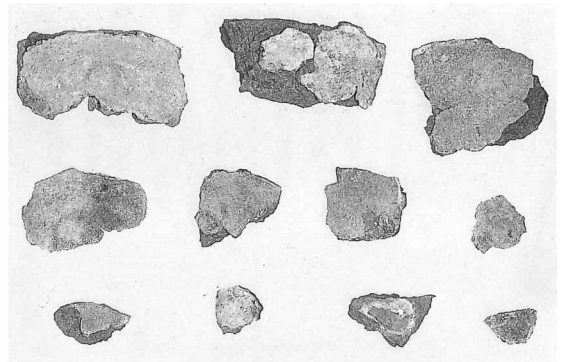
帯金具



轡



留め金具



雲珠破片



須恵器甕形土器



須恵器甕形土器



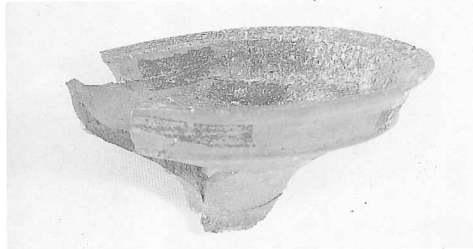
須恵器甕形土器



須恵器甕形土器



須恵器甕形土器

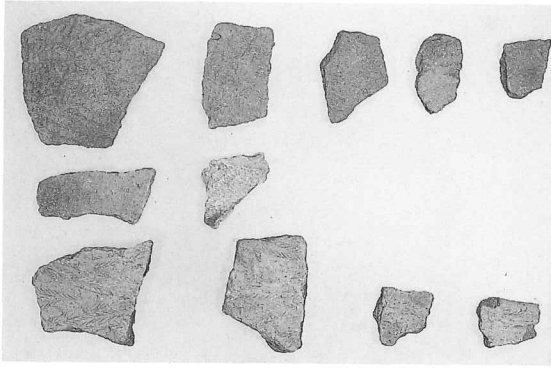


◀ 甕

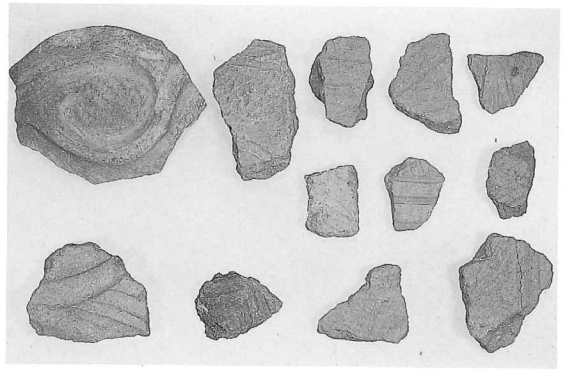


土師器高坏

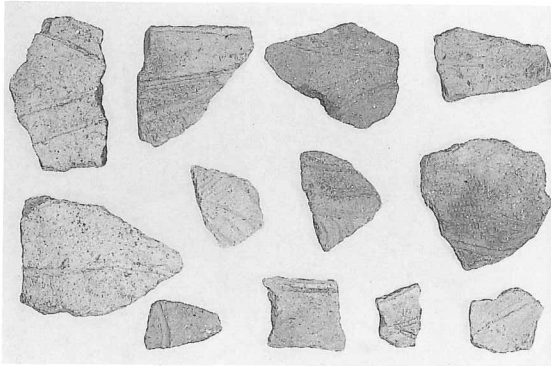
第十四図版 遺物



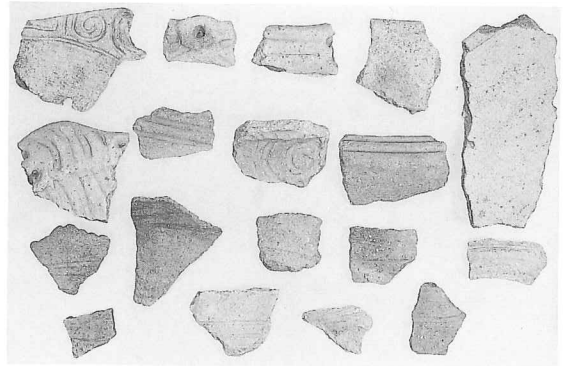
縄文前期土器



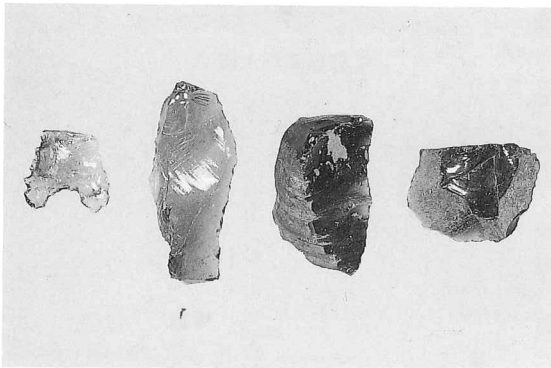
同・中期土器



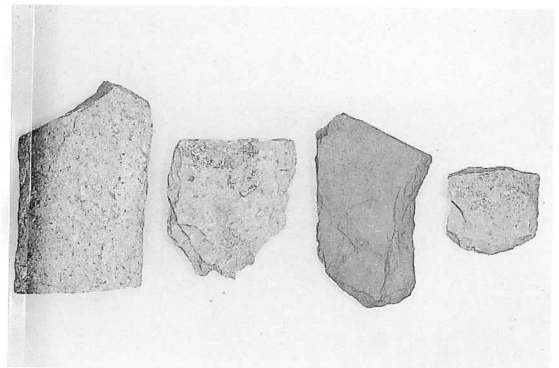
同・後期土器



同・後期土器



出土石器



出土石器



佐藤町長の鍬入れ



高塚恵利さん（地主）



田中教育長（調査団長）



掛川調査主任



比田井良嗣さん（碑所有者）

第十六図版 風景



調査風景



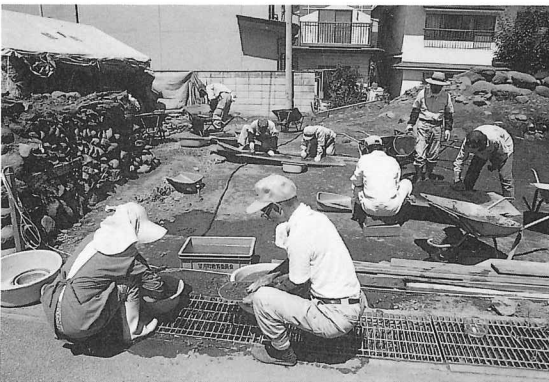
調査風景



調査風景



特別調査員 西沢寿晃先生



調査風景

- 望月町文化財調査報告書 第1集 『下吹上遺跡』(昭和53年度)
- 第2集 『犬飼遺跡第1次緊急発掘調査報告書』(昭和53年度)
- 第3集 『犬飼遺跡第2次緊急発掘調査報告書』(昭和54年度)
- 第4集 『又久保遺跡緊急発掘調査報告書』(昭和55年度)
- 第5集 『望月町遺跡詳細分布調査報告書』(昭和55年度)
- 第6集 『尾崎第4号古墳、大塚第1号・2号古墳緊急発掘調査報告書』(昭和55年度)
- 第7集 『新水A・B遺跡』(昭和55年度)
- 第8集 『金塚遺跡緊急発掘報告書』(昭和56年度)
- 第9集 『真光寺第1号古墳緊急発掘調査報告書』(昭和57年度)
- 第10集 『春日尾崎遺跡緊急発掘調査報告書』(昭和57年度)
- 第11集 『後沖遺跡緊急発掘調査報告書』(昭和57年度)
- 第12集 『析久保A遺跡緊急発掘調査報告書』(昭和57年度)
- 第13集 『竹之城原遺跡・浄永坊遺跡・浦谷B遺跡緊急発掘調査報告書』(昭和58年度)
- 第14集 『胡桃沢・瓜生坂A・宮久保A・布施山寺A・岩井遺跡緊急発掘調査報告書』(昭和58年度)
- 第15集 『望月城跡緊急発掘調査報告書』(昭和59年度)
- 第16集 『岩清水遺跡緊急発掘調査報告書』(昭和60年度)
- 第17集 『平石遺跡緊急発掘調査報告書』(昭和63年度)
- 第18集 『上吹上遺跡緊急発掘調査報告書』(平成元年度)
- 第19集 『平石遺跡第2次緊急発掘調査報告書』(平成2年度)
- 第20集 『山ノ神A遺跡、山ノ神第3・4号古墳緊急発掘調査報告書』(平成2年度)
- 第21集 『下吹上遺跡第2次緊急発掘調査報告書』(平成3年度)
- 第22集 『天神城跡緊急発掘調査報告書(総括編)』(平成5年度)
- 第23集 『大塚第3号古墳緊急発掘調査報告書』(平成8年度)

望月町文化財調査報告書 第23集

大塚第3号古墳

——緊急発掘調査報告書——

発行日 平成9年3月17日
編集者 望月町教育委員会
発行者 望月町
望月町教育委員会
長野県北佐久郡望月町大字望月263
印刷 ほおずき書籍株式会社
